

県指定史跡

伊 方 古 墳

保存整備・事前調査報告書

福智町文化財調査報告書

第 1 集

2 0 0 7

福智町教育委員会

県指定史跡

伊 方 古 墳

保存整備・事前調査報告書

福智町文化財調査報告書

第 1 集

2 0 0 7

福智町教育委員会

序

平成 18 年 3 月 9 日に赤池町、金田町、方城町が合併し福智町が誕生しました。福智町は福智山の山麓に広がる自然と歴史あふれる町であり、町内には多くの文化遺産が残されています。今回は福智町における最初の文化財調査報告書となります。

報告内容は旧方城町で調査し、保存整備を行った伊方古墳に関するものです。この伊方古墳は、古くから郡内最大規模の横穴式石室と墳丘を持つ貴重な文化遺産として県の史跡に指定されています。

今回、事前調査を行った結果から、今から約 1,400 年前、6 世紀の終わりにつくられた古墳ということが分かりました。また、古墳の規模も周溝と呼ばれる古墳を取り巻く溝状の遺構の発見により具体的に推定可能となりました。地元住民の関心も高く、調査後の現地説明会には町内外から 70 名を超える参加者があり、担当者の説明に熱心に耳を傾けていました。

現在は保存整備の後、郷土史を学ぶ場として広く開放しています。遠賀川流域の古墳同時公開にも参加しています。付近を通られる際は、ぜひお立ち寄りいただき、郷土の歴史に触れてみてください。

最後に、本書が郷土の資料として活用いただければ幸いに存じます。

平成 19 年 3 月
福智町教育委員会
教育長 桑 野 隆 泰

例 言

1. 本書は県指定史跡伊方古墳の保存整備に伴い、平成 14 年度、15 年度に行った事前発掘調査と、平成 15 年度、16 年度に行った保存整備工事の報告書である。福智町文化財調査報告書の第 1 集にあたる。
2. 発掘調査は町単独事業として町費で、基本設計、実施設計と保存整備工事は県費補助、町費により方城町教育委員会が主体となり実施した。
3. 整備工事の平成 14 年度の基本設計、実施設計と平成 16 年度施工監理業務は正栄建装株式会社が、平成 15 年度工事を丸山工務店、平成 16 年度工事を有限会社堀政建設が行った。
4. 出土遺物の整理は方城町教育委員会で行い、報告書作成は福智町教育委員会で行った。
5. 本書に掲載した遺構図は井上勇也、岸本圭、杉原敏之、仲谷あかね、吉岡淳子が、遺物の実測図を井上が作成した。図面の浄書は井上による。
6. 本書に掲載した遺構写真は井上、岸本、杉原、森井啓次が、遺物写真は井上が撮影した。
7. 本書に使用した方位は磁北である。国土座標に伴う座標軸は設定していない。
8. 本書の執筆はVを九州歴史資料館 加藤和歳が、他を井上が行い、編集は井上が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査、保存整備の経緯	1
2. 現在までの事業	1
3. 調査・整備の組織	1
4. 調査・整備指導	2
II. 位置と環境	3
III. 整備の記録	5
1. 整備計画の目的	5
2. 実施設計	5
3. 整備工事の実施	6
IV. 調査の記録	32
1. 調査の経過と調査の方法	32
2. 遺構と遺物	33
V. 伊方古墳・野添横穴墓出土資料の保存修復 九州歴史資料館 加藤和歳	48
VI. おわりに	54

図版目次

- 図版 1 1. 平成 15 年度整備工事着工前・2. 平成 15 年度整備工事竣工・3. トレンチ埋め戻し状況
1 層目（真砂土）・4. トレンチ埋め戻し状況 2 層目（現地発生土）・5. 墳丘盛土配合状況・
6. 墳丘盛土充填状況
- 図版 2 1. 墳丘盛土転圧状況・2. 墳丘法面整形状況・3. 墳丘法面整形状況・4. 墳丘頂部整形状況・
5. 平成 16 年度工事正面着工前・6. 平成 16 年度工事正面竣工・7. 平成 16 年度工事裏側
着工前・8. 平成 16 年度工事裏側竣工
- 図版 3 1. 墳丘頂部遮水シート敷設状況・2. 墳丘頂部粘性土充填状況・3. 石室内面上排水材敷設
状況・4. 石室床面整形状況・5. 石室内洗浄状況・6. 閉塞部埋め戻し状況・7. 墓道部吸出
防止材敷設状況・8. 墓道部面上排水材敷設状況
- 図版 4 1. 墓道部麻土養積状況・2. 墓道部土系弾性舗装施工状況・3. 墓道部進入階段床掘状況・
4. 墓道部完了・5. 石室入り口部扉ベースコンクリート設置状況・6. 石室入り口部扉設置
完了・7. 石室入り口部整形状況・8 石室入り口部整形完了
- 図版 5 1. 伊方古墳調査前状況・2. 玄室調査後状況・3 石室床面完掘状況
- 図版 6 1. 玄室隅部の状況（奥壁と右側壁）・2. 玄室隅部の状況（右側壁と袖石）・3. 前室床面完
掘状況
- 図版 7 1. 前室床面石材検出状況・2. 閉塞石終点状況・3. 石室入り口部閉塞石検出状況
- 図版 8 1. 玄室縦断土層状況 1・2. 玄室縦断土層状況 2・3. 玄門部 C-D 土層状況
- 図版 9 1. 前室縦断土層状況・2. 前室 E-F 土層状況・3. 前室 G-H 土層状況
- 図版 10 1. 墓道部完掘状況・2. 周溝検出状況 1・3. 周溝検出状況 2
- 図版 11 1. 石室前面トレンチ縦断土層状況（上部）・2. 石室前面トレンチ縦断土層状況 1・3. 石室
前面トレンチ縦断土層状況 2
- 図版 12 1. 石室前面トレンチ横断土層状況 1・2. 石室前面トレンチ横断土層状況 2-1・3. 石室前
面トレンチ横断土層状況 2-2
- 図版 13 1. 周溝土層状況・2. トレンチ A 完掘状況・3. トレンチ AK-1、K-2 検出状況
- 図版 14 1. トレンチ AK-1 完掘状況・2. トレンチ AK-2 完掘状況・3. トレンチ A 土層状況 1
- 図版 15 1. トレンチ A 土層状況 2・2. トレンチ B 完掘状況・3. トレンチ B 土層状況
- 図版 16 1. トレンチ B 溝部分検出状況・2. トレンチ B 溝部分土層状況・3. トレンチ B 西側工事時
拡張部分溝検出状況
- 図版 17 1. トレンチ C 上面・2. トレンチ C 完掘状況・3. トレンチ CA-B 土層状況 1
- 図版 18 1. トレンチ CA-B 土層状況 2・2. トレンチ CC-D 土層状況 1・3. トレンチ CC-D 土層状況 2
- 図版 19 1. 墳丘土層状況・2. 伊方古墳頂部より下田川を見る
- 図版 20 出土遺物
- 図版 21 出土遺物
- 図版 22 出土遺物
- 図版 23 出土遺物

插图目次

第 1 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第 2 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 1	7
第 3 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 2	8
第 4 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 3	9
第 5 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 4	10
第 6 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 5	11
第 7 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 6	12
第 8 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 7	13
第 9 図	平成 15 年度伊方古墳整備工事实施図 8	14
第 10 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 1	17
第 11 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 2	18
第 12 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 3	19
第 13 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 4	20
第 14 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 5	21
第 15 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 6	22
第 16 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 7	23
第 17 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 8	24
第 18 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 9	25
第 19 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 10	26
第 20 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 11	27
第 21 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 12	28
第 22 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 13	29
第 23 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 14	30
第 24 図	平成 16 年度伊方古墳整備工事实施図 15	31
第 25 図	遺構配置図 (1/100)	32
第 26 図	石室前面トレンチ実測図 (1/60)	折込
第 27 図	石室前面トレンチ出土遺物実測図 1 (1/3)	34
第 28 図	石室前面トレンチ出土遺物実測図 2 (1/3)	37
第 29 図	石室実測図 (1/60)	折込
第 30 図	石室内出土遺物実測図 1 (1/3)	40
第 31 図	石室内出土遺物実測図 2 (2/3)	41
第 32 図	トレンチ A 実測図 (1/60)	43
第 33 図	トレンチ A K-1・K-2 実測図 (1/30)	44
第 34 図	トレンチ A K-1 出土遺物実測図 (1/3)	44
第 35 図	トレンチ A K-2 出土遺物実測図 (1/3)	45
第 36 図	石室前面トレンチ・トレンチ A 出土石器・玉・鉄器実測図 (2/3)	45
第 37 図	トレンチ B 実測図 (1/3)	46

第 38 図	トレンチ C 実測図 (1/3)	47
第 39 図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	47
第 40 図	墳丘土層断面図 (1/60)	47
第 41 図	伊方古墳出土辻金具の蛍光 X 線分析	52
第 42 図	伊方古墳出土鈴の蛍光 X 線分析	52
第 43 図	野添横穴墓出土釦の蛍光 X 線分析	53
第 44 図	野添 A-1 号横穴墓出土鈴の蛍光 X 線分析	53
第 45 図	近隣の古墳	57

I. はじめに

1. 調査・保存整備の経緯

方城町教育委員会では、平成8年度伊方古墳指定地の公有地化を行った。その後平成10年度、伊方古墳横の石垣が崩壊し、石垣の復旧工事に伴い周溝の範囲確認と石室実測を行い報告書の刊行を行った。その後、平成14年度に保存整備の計画が具体化し、平成14年度県費補助を受け整備計画、基本設計、実施設計を行った。この計画の中で、平成14年度、15年度に現在まで確認されていない石室床面と墓道および周溝の確認を行なうこととなった。その調査成果を基に平成15年度、16年度県費補助を受け保存整備工事を行った。

2. 現在までの事業

平成9年3月31日付	指定地の公有地化
平成9年5月6日	石垣の崩壊
平成9年6月12日～平成9年7月3日	墳丘調査
平成9年7月28日～平成9年8月13日	周溝の確認調査
平成9年9月24日～平成9年10月20日	石室実測
平成10年3月31日	報告書の刊行

3. 調査・整備の組織

(1) 調査・整備の組織 平成14年度～16年度

伊方古墳調査・整備指導

九州大学名誉教授 西谷 正（平成14～16年度）

静岡大学名誉教授 藤田 等（平成14～16年度）

福岡県教育委員会

文化財保護課

教育庁筑豊教育事務所

技術主査 田上 稔

主任技師 杉原 敏之（平成14～15年度）

主任技師 森井 啓次（平成16年度）

方城町教育委員会

社会教育課

教育長 金山 松榮

課長 中山 利彦（平成14～15年度）

課長 香月 秀昭（平成16年7月まで）

課長補佐 石谷 敏行（平成16年7月まで、平成16年8月より課長事務取り扱い）

係長 朝部 信恵

係員 仲村 浩美（文化財担当、平成16年2月まで）

係員 皆川 泰広（文化財担当、平成16年3月より）

嘱託職員 井上 勇也（平成15年度より文化財担当）

(2) 報告書作成 平成 18 年度

福智町教育委員会（平成 18 年 3 月 6 日合併）

	臨時教育長	田中貴美男（平成 18 年 3 月 6 日～7 月 31 日）
	教 育 長	桑野 隆泰（平成 18 年 8 月 1 日～）
生涯学習・人権同和教育課	課 長	石井 康文（平成 18 年 3 月 6 日～7 月 31 日）
	課 長	田村 一人（平成 18 年 8 月 1 日～）
生涯学習係	係 長	朝部 信恵
	係 長	原口慎一郎
	係 員	廣渡 勝（文化財担当）
	嘱託職員	井上 勇也（文化財担当）

4. 調査・整備指導の概要

平成 15 年 3 月

調査現場にて調査成果を確認

石室前面トレンチの閉塞石、墓道の検出状況について

平成 15 年 10 月

調査現場にて調査結果を確認

トレンチ A、B、C と石室前面トレンチの状況、出土遺物の確認。

平成 15 年 12 月

調査現場にて調査成果を確認、平成 15 年度の整備内容の検討

平成 16 年 7 月

現場にて平成 15 年度整備内容の確認、平成 16 年度整備内容について検討

平成 17 年 3 月

現場にて 16 年度整備内容について確認

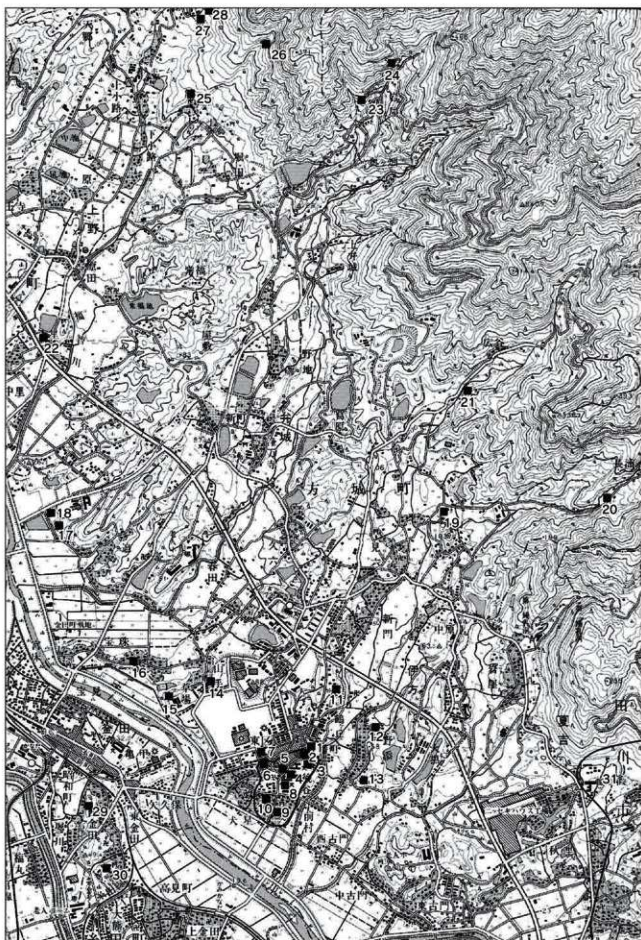
Ⅱ．位置と環境

福智町は田川郡の北端に位置し、平成 18 年 3 月 6 日赤池町、金田町、方城町の三町が合併し誕生した。遠賀川支流の中元寺川、彦山川が町内で合流する。北は福智山系を挟んで北九州市、南は田川市、糸田町、東は香春町、西は直方市、飯塚市に隣接する。町の北側は福智山を中心とする山岳地帯であり、起伏に富んだ地形である。現在の人口は約 26,000 人、観光、教育をはじめとする人の活力を生かした町作りを展開している。文化的には、400 年の歴史を誇る上野焼に代表される焼物の里、童謡作曲家の河村光陽生誕の地として有名である。

文化財としては、国の登録文化財 1 件、県指定文化財 8 件、旧町指定文化財が 13 件と指定、登録文化財だけでも 22 件を数え、他にも多くの文化財が所在し地域の歴史に触れる材料が豊富な土地である。そこで登録、指定を受けた文化財について少し触れてみたい。町内でもっとも著名な文化財は登録文化財の九州日立マクセル赤煉瓦記念館、県指定文化財を 3 件所有する上野興国寺であろう。前者は旧三菱方城炭鉱の建物であり築 100 年を越え、内部は社員用の喫茶室、展示場として現在も活用されている。後者は足利尊氏も隠れたとされる古刹である。古文書、観音堂、木造玄晦禪師坐像は県指定文化財に指定されている。今回報告する伊方古墳も昭和 52 年に県指定史跡に指定され、今日に至っている。また、町内には県下でも著名な天然記念物であるエドヒガンの虎尾桜、定禅寺境内の迎接の藤と呼ばれる藤がある。前者は福智山の中腹にあり道は幾分険しいものの毎年盛りになると多くの見物客が訪れている。後者の藤も毎年盛りには多くの見物客が訪れ、花見を楽しんでいる。

町内には、縄文時代より人々が生活していた痕跡が残され、伊方古墳の作られた古墳時代の遺跡も多く存在する。ここでは町内の古墳時代を中心に周辺の状況を見ていく。古墳時代に入る直前、弥生時代後期末から弥生時代終末と考えられる宝珠遺跡の石棺墓から内行花文鏡が出土している。また、弥生時代終末から古墳時代の前期と考えられる三本松古墳群からも同じく内行花文鏡が出土している。古墳時代前期の古墳では迫古墳が知られる。主体部は粘土郭木棺で、副葬品等は出土しないが形態から前期古墳と位置づけられている。町内では以後目立った古墳の造営は行われていないようである。古墳時代の中期は前述のように目立った古墳の造営もなく町内の様相は不明な点が多い。古墳時代後期になると各地で群集墳作られる。田川郡内は地質的な影響から横穴墓が群集墳として数多く造営される。町内でも例外ではなく数多くの横穴墓が造営される。この時期の古墳は伊方古墳のように単独で存在するか群集墳を形成しても十数基と規模が小さいのが特徴である。この様子から古墳の造営を行った人が少なかったと考えられる。また、旧金田町の神崎 1 号墳出土の舞踏環柄頭や今回報告する伊方古墳の金銅製馬具等、町内の古墳からは優れた副葬品が出土している。他地域では横穴墓の副葬品も古墳に劣らず優れたものがあるが、町内では古墳を造営した人々と横穴墓を造営した人々の間にはなんらかの差があった可能性もある。

古墳時代の集落であるが、現在のところめだつた集落の遺跡は発見されていない。しかし、古墳時代の土器が旧方城町の伊方や旧赤池町の諏訪山の川底で発見されている。今後調査が進めば伊方の丘陵部や赤池の河岸段丘上などで集落が発見される可能性がある。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 伊方古墳 2. 伊方石丸遺跡 3. 伊方小学校遺跡第1地点 4. 伊方小学校遺跡第2地点 5. 伊方小学校遺跡第3地点 6. 後谷遺跡 7. 九州日立マクセル赤煉瓦記念館 8. 伊方城園遺跡 9. 法華屋敷遺跡 10. 前村遺跡 11. 長谷横穴墓群 12. 野添遺跡群 13. 高崎山古墳 14. 三本松古墳群 15. 草場遺跡 16. 宝珠遺跡 17. 迫横穴墓群 18. 迫古墳 19. 金山遺跡 20. 長浦遺跡 21. 出口遺跡 22. 宮ノ馬場遺跡 23. 岩屋高麗窯跡 24. 岩屋権現 (梵字・大杉) 25. 上野興国寺 26. 上野釜の口窯跡 27. 上野皿山本窯跡 28. 福泉坊跡 29. 城山古墳群 30. 玉穂山古墳 31. 夏吉古墳群

Ⅲ．整備の記録

1. 整備計画の目的

- ① 伊方古墳が彦山川流域（田川地域）においても屈指の大型古墳であり発掘調査も完了し、今後史跡公園として整備し、公開する。
- ② 方城町の中心に位置し、小・中学校にも近接していることや地域住民の関心も高く、地域の憩いの場として整備を行う。

2. 実施設計

(1) 基本方針

①史跡の保存（石室・墳丘等）

- 保存整備は史跡の保存を重視し、史跡等に影響のないよう留意する。

②史跡の活用（学習継承・地域づくり）

- 地域住民及び見学者が歴史的な文化遺産として正しく学習し、後世に語り継がれるような施設とする

③景観保全（周辺環境と調和）

- 整備することで地域住民の憩いの場として利用できるようにし、周辺地域の環境と調和の取れた施設とする。

- 当時のイメージを重視し、素材及び色相等に留意する。

- 整備にあたり高齢者や身障者への配慮を十分に行う。

(2) 土地利用計画

①復元・保存ゾーン

- 墳丘復元・石室修復・墓道復元・周溝修復

②憩いの広場ゾーン

- ベンチ・花壇・植栽等

③エントランスゾーン

- 墓道復元・周溝復元・ガイダンス施設

3. 整備工事の実施

(1) 平成 15 年度の工事内容

① 工事の概要

整備工事は 2 カ年の計画であったため、事前調査の成果を基に平成 15 年度は墳丘整備、石室前面以外のトレンチの埋め戻し、敷地造成を行った。

② 実施設計の検討

当初計画では、墳丘径 30 m、2 段築成の円墳として復元を考えていたが、調査の結果石室中から 16 m 地点で周溝を確認、また現況の墳丘からは段築の痕跡は伺えないことから墳丘径 32 m 前後の段築なしの円墳と推定し計画の修正を行った。

敷地造成は次年度工事工事予定の古墳正面部分を除きトレンチ A、B、C、の埋め戻しと敷地内の造成（排水勾配の確保）を行った。

(2) 平成 15 年度施工の工事

① トレンチの埋め戻し

トレンチの埋め戻しは遺構面保護のため、真砂土を充填し、底面より 30cm を保護盛土とした。その上部を、計画レベルまで現地発生土（トレンチ掘削時の排土）を充填し転圧を行った。転圧はプレートにより人力で行った。

② 墳丘盛土

墳丘は想定される規模での復元は無理なため、半径 10m、直径 20m の規模で復元を行った。一部墳丘西側では復元墳丘のラインが敷地外にかかるため、自然石の擁壁により土留めを行った。

墳丘盛土は、20 cm を一層とし、巻きだし工法とローラー、タンバによる転圧で形成し、法面整形は人力で行った。

盛土の構造は、既存墳丘に接する部分に墳丘の形状にあわせ粘性土を 30cm ～ 50 cm 充填しその外側に真砂土と粘性土を 1：1 で混合した混合土を整形土として使用した。墳頂部は粘性土を 30cm 敷き均しプレートにより転圧を行った。その際、墳丘中心より放射状に排水勾配を確保した。

整形完了後、真砂土を墳丘外面に敷き均し高麗芝による張芝を行った。

③ 周辺整備

● 転落防止柵

平成 15 年度は墳丘東側部分に擬木による転落防止柵を設置した。既存の自然石積みの擁壁にコア抜きによる削孔を行い設置を行った。

● 敷地造成

墳丘を中心に東西に排水勾配をとり敷地内の整地を行った。

平成15年度 伊方古墳整備工事竣工図

設計図書目録		
番号	図面名称	枚数
	表紙・図面目録	1
1	現況平面図	1
2	造成・割付平面図	1
3	縦断面図	1
4	横断面図－1	1
5	横断面図－2	1
6	施設・植栽平面図	1
7	詳細図	1
計		8枚

方城町役場

工事名称		伊方古墳		整備工事	
図面名称		表紙・設計図書目録			
縮尺		—		図番	
工事年月日		平成 年 月 日			
承認		設計			
方 城 町 役 場					

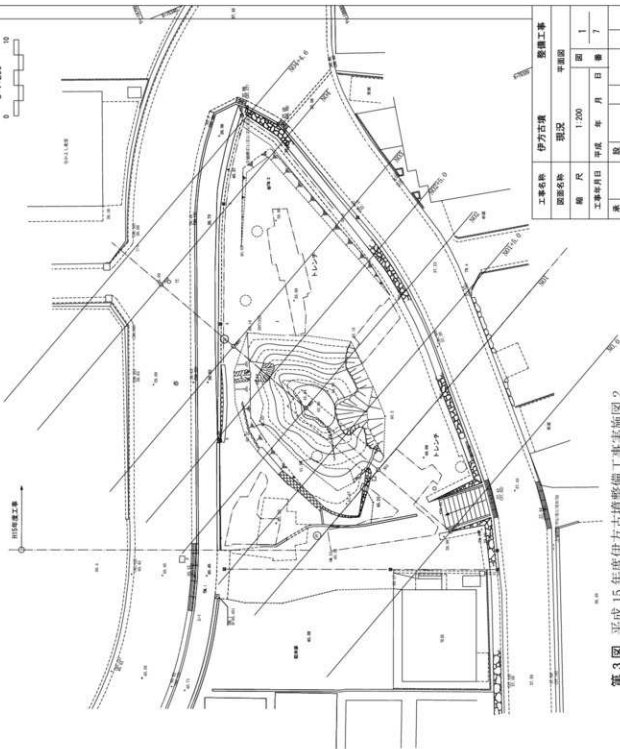
第 2 図 平成 15 年度伊方古墳整備工事実施図 1

現況 平面図



0 5 10 200

旧1号国道工事



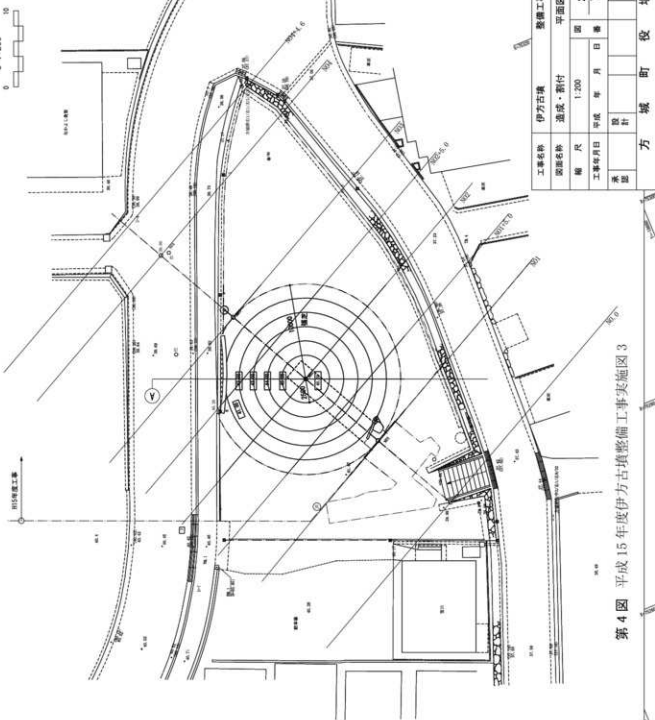
工事名称	伊方古墳	整備工事
図面名称	現況	平面図
縮尺	1:200	図
工事年月日	平成 年 月 日	1
設計		7
監理		
方	城	町
役	場	

第3図 平成15年度伊方古墳整備工事実施図2

造成・割付 平面図

0 5 10 200

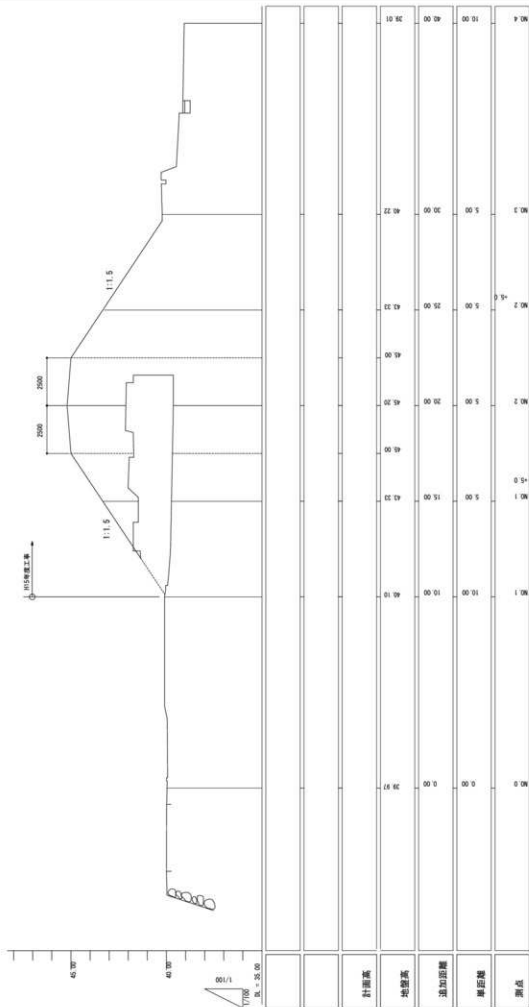
S=1/200



工事名称	伊方古墳	整備工事
図面名称	造成・割付	平面図
縮尺	1:200	原 2
工事年月日	平成 年 月 日	審 7
審 計		
方 城 町 役 場		

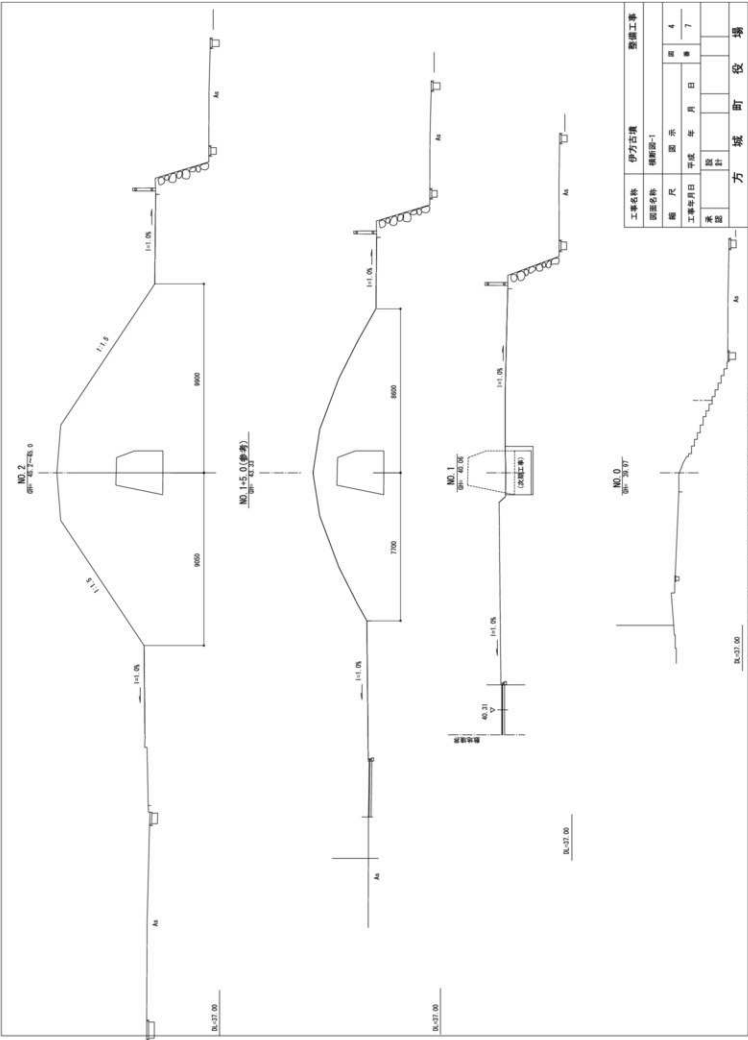
第4図 平成15年度伊方古墳整備工事実施図3

總計: 100



工事名称	伊予古墳				築構工事			
図面名称	断面							
縮尺	図示				縮		3	
工事年月日	平成 年 月 日				日		7	
米	図	計						
方 城 町 役 場								

第5図 平成15年度伊方古墳整備工事実施図4



伊方古墳		断面図-1		伊方古墳		断面図-1	
工事名称	伊方古墳	断面名称	伊方古墳	断面名称	伊方古墳	断面名称	伊方古墳
図尺	1:100	図尺	1:100	図尺	1:100	図尺	1:100
工事年月日	平成 年 月 日	工事年月日	平成 年 月 日	工事年月日	平成 年 月 日	工事年月日	平成 年 月 日
承認		承認		承認		承認	
設計		設計		設計		設計	
監理		監理		監理		監理	
調査		調査		調査		調査	
測量		測量		測量		測量	
補綴		補綴		補綴		補綴	
その他		その他		その他		その他	

第 6 図 平成 15 年度伊方古墳整備工事実施図 5

NO. 4
Bk-35.01



NO. 3
Bk-42.22

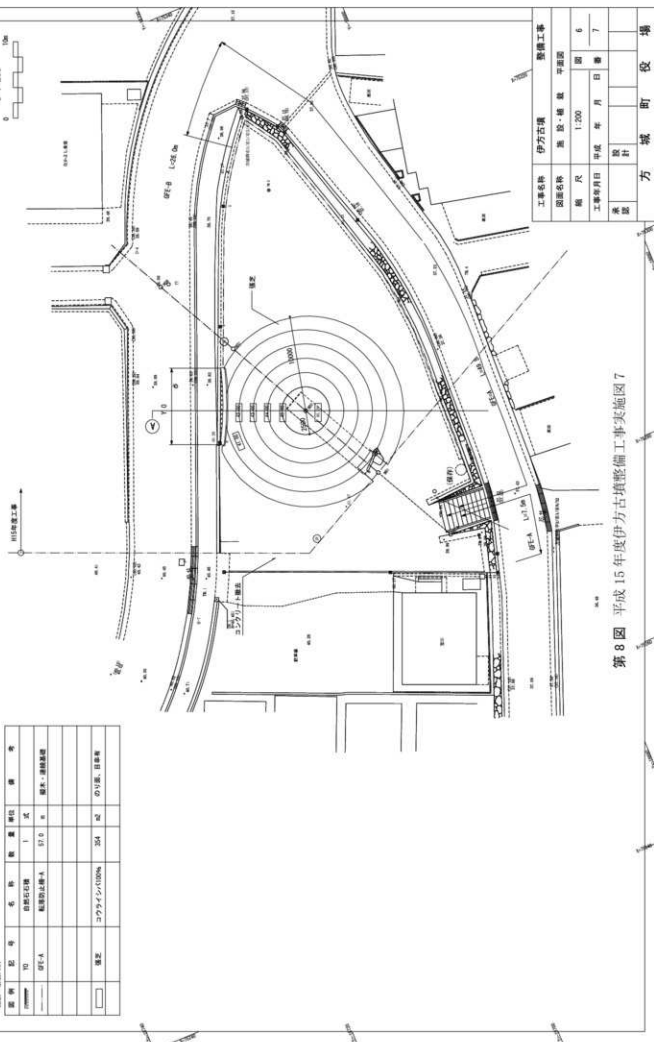


NO. 2.5.0 (参考)
Bk-42.33



伊方古墳		伊方古墳		伊方古墳	
工事名称	伊方古墳	工事名称	伊方古墳	工事名称	伊方古墳
断面名称	断面図-2	断面名称	断面図-2	断面名称	断面図-2
縮尺	図示	縮尺	図示	縮尺	図示
工事年月日	平成 年 月 日	工事年月日	平成 年 月 日	工事年月日	平成 年 月 日
番 号	5	番 号	5	番 号	5
役 員	7	役 員	7	役 員	7
方 城	町 役 場	方 城	町 役 場	方 城	町 役 場

第7図 平成15年度伊方古墳整備工事実施図 6



第8図 平成15年度伊方古墳整備工事実施図7

(3) 平成 16 年度の工事内容

① 工事の概要

平成 16 年度は、墓道部の整備のため墓道部、閉塞石の保護盛土、排水工事、石室入り口部の扉の設置、進入階段の設置を行った。また、ガイダンス施設等を設置し環境整備を行った。

② 実施設計の検討

当初計画では、バリアフリーに配慮する計画であったが墓道の残存状況から考え、本来古墳を見ていた視線を復元することにした。そのため墓道部に保護盛土と舗装を行い石室への進入路を確保することにした。墓道部を低い位置で復元することにより墓道への進入はトレンチ埋め戻し後に、充填土に階段を設置することとした。

石室内の雨漏りについて、当初計画にはなかったが、整備指導委員、県文化財保護課等と協議を行った結果、墳頂部に遮水シートを入れることにし、墳頂部の再形成を行うこととした。また、墳丘背面の周溝部表現について、雨水対策のため浸透性の表層を計画していたが、敷地周囲の擁壁に水抜きがないため非浸透性の土系弾性舗装を行うこととした。また、石室内から墓道部まで一連の排水材を使用し、敷地外に排水することとした。

墓道部については、当初ソイルセメントで壁面、通路部の舗装を計画したが、施工上、管理の問題より墓道壁面は張芝、通路部分は土系弾性舗装を行うこととした。

周溝表現は、敷地いっぱいまで伸ばし表現することとした。

敷地内の張芝は平成 16 年度施工部分に関しては、野芝とした。高麗芝に比べ排水能力が高いため変更を決定した。

敷地内に植栽等を行い、憩いの場とする計画があったが築造時のイメージを考え敷地内は張芝のみとした。

(4) 平成 16 年度施工の工事

① トレンチの埋め戻し、墓道部の保存整備

トレンチの埋め戻しは墓道東側拡張部分は遺構面保護のため、最初に砂質土を用い平均して 15 cm を 1 層として 2 層の盛土を行い、上部を真砂土を用い埋め戻しを行った。

墓道部は最初 15 cm の砂質土による盛土を行い。その上部を真砂土を用い吸出防止材のレベルまで埋め戻しを行った。閉塞部分の隙間には真砂土を充填しつきかためを行った。埋め戻しは拡張部分、墓道部とも転圧はこ、プレートにより人力で行った。

墓道部の整形は麻土嚢を用いた。麻土嚢を 4 段から 5 段積み墓道の形状を形成し、実際の遺構面と土嚢の間は真砂土を充填し、つきかためを行った。墓道より上部は真砂土を 20 cm 1 層とし盛土を行った。

墓道への進入路である階段部分はトレンチの埋め戻し土に床掘を行い、遺構面に直接当たらないように施工した。自然石の両側は墓道部と同じく麻土嚢積みとし整形を行った。

墓道部の排水であるが、石室より面上排水材を用い排水を確保した。墓道部に流れ込んだ雨水とともに集水枘から敷地外へ排出するようにした。

墓道部の仕上げは保護盛土の上部に遺構面への雨水の染み出しを防ぐため吸出防止剤を敷き、面上排水材、クラッシュランを敷き転圧をかけた。閉塞部で閉塞石にあたり浮き上がる部分は部分

的にカットし、均一になるように敷設した。舗装は土系弾性舗装を用い、法面は張芝を行った。

②石室内保存整備

石室内の埋め戻しは最初 30cm を砂質土で保護盛土を行い、表面仕上げを粘性土で行った。砂質土と粘性土の間は真砂土を充填した。真砂土には面上排水材を埋設し、これを墓道部まで延伸し排水を確保した。石室奥壁前は仕上げに粘性土を使用せず、排水のため砂質土と真砂土のみで埋め戻しを行った。

石室内をスチームミストにより洗浄を行った。

石室入り口部の扉は取替えを行った。閉塞石があるためなるべくアンカー等の処置をしないために、コンクリートベースを設置し、上部はボルトで突っ張る構造とした。また、なるべく目立たないよう着色し、メッシュも強度が保てる限り細く仕上げた。

③周辺整備

●ガイダンス施設

敷地内に調査の内容を示した案内板を設置し、既存古墳東側の階段入り口横に設置されていた案内板の文字張替えを行った。

敷地内で表現できる限り周溝のラインを表現した。墳丘正面は民地との境界であり車両も出入りするためカラーアスファルトで、墳丘背面は墓道部と同じ土系弾性舗装で施工した。

●転落・進入防止柵

平成 15 年度工事に追加し墳丘西側の擁壁部分に擬木柵を転落防止のため施工した。墳丘背面であること、擁壁が高く危険性があるため転落防止のため擬木柵を設置した。

墳丘正面は犬猫の侵入防止のため、低いメッシュフェンスを設置し、前面に低木の植栽を行った。フェンスの高さを低くしたことは、景観配慮を考慮した結果である。

●敷地造成

敷地内に張芝を行った。築造時のイメージを考え植栽等は行っていない。排水は表面排水のみとした。これは周囲の擁壁に排水設備がなく、集水を行うことで擁壁崩壊の危険性があるためである。墳丘前面は墓道部の排水施設により排水が可能であり、よほどの大雨でない限り土砂の流出の可能性は低いと考えられる。

平成16年度文化財保護事業

伊方古墳整備工事 竣工図

図面リスト

番号	図面名称	縮尺	備 考
1	表紙	-	
2	現況・地平面図	1:200	
3	造成・排水平面図	1:200	
4	施設平面図	1:200	
5	植栽平面図	1:200	
6	詳細図 1	図 示	Aa植栽-Aa、カラ-Aa植栽-Aa、土著樹性植栽、自然石籬石-Aa
7	詳細図 2	図 示	自然石階段、転落防止柵-A、メッシュフェンス-A
8	詳細図 3	図 示	メッシュフェンス-A植栽、メッシュフェンス-A1・B2、説明板-A、説明板-B
9	詳細図 4	図 示	説明板-C、顕名石、名所碑移設
10	詳細図 5	図 示	石室前・堀込溝部は砂取り・覆石・堀込溝部は砂取り・覆石(透水シート)
11	詳細図 6	図 示	石室保存整備
12	詳細図 7	図 示	墓道保存整備
13	詳細図 8	図 示	施設階段一時撤去及び覆石、施設階段植栽
14	詳細図 9	図 示	排水管理図、墓水納、U型排水溝
15	詳細図 10	図 示	墓道保存整備(造成土留)、石室入口階境石敷砂

工事名称 伊方古墳整備工事

図面名称 表紙

期 限

工事開始日

年 月 日

期 限

年 月 日

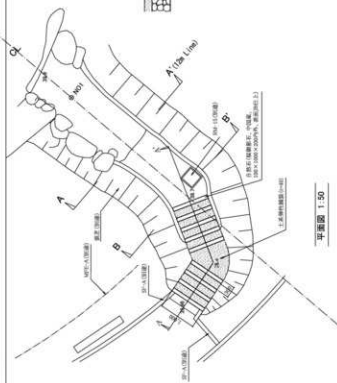
期 限

期 限

期 限

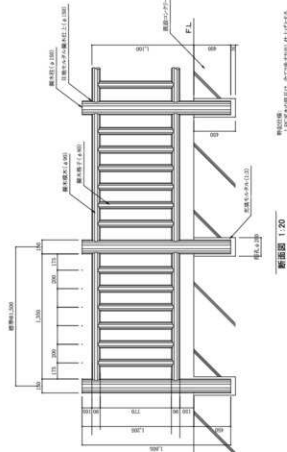
方 城 町

第10図 平成16年度伊方古墳整備工事実施図 1



平面図 1:50

転落防止柵-A / GFE-A

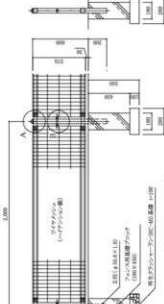


断面図 1:20

※設置場所
1. 転落防止柵は、転落防止柵を設置する目的、必要に応じて
2. 柵の高さは、柵の設置場所に応じて、必要に応じて
3. 柵の設置は、柵の設置場所に応じて、必要に応じて
4. 柵の設置は、柵の設置場所に応じて、必要に応じて

断面図 1:10

メッシュフェンス-A / MFE-A

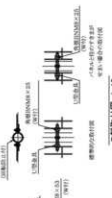


断面図 1:20

※設置場所
1. 転落防止柵は、転落防止柵を設置する目的、必要に応じて
2. 柵の高さは、柵の設置場所に応じて、必要に応じて
3. 柵の設置は、柵の設置場所に応じて、必要に応じて
4. 柵の設置は、柵の設置場所に応じて、必要に応じて

A部取付図 1:10

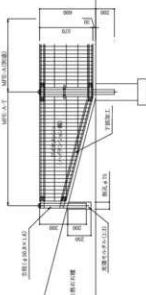
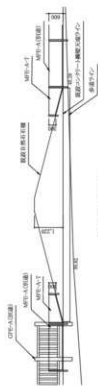
日鉋取付図 1:10



伊方古墳整備工事

工事名称	伊方古墳整備工事
調査名称	詳細図 2
図尺	1/50
調査日	年 月 日
調査員	氏名
設計	氏名
監理	氏名
施工	氏名
図	氏名
方	氏名
城	氏名
町	氏名

第16図 平成16年度伊方古墳整備工事実施図7

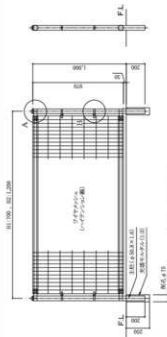


上は保はトプシブフエンルハに事なる。
金下頭は、眞原自然石を鑿に合せて、加工すること。

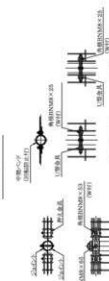
新圖 1:20

説明板-A / SB-A

メッジユフエンス-B1・B2 / MFE-B1・B2



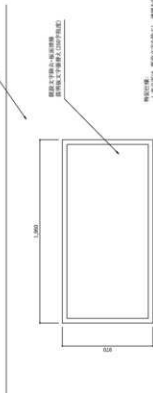
新圖 1:20



A部取付図 1:10

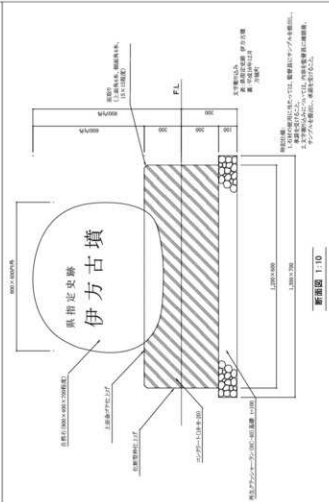
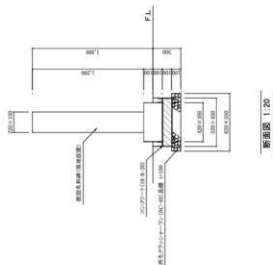
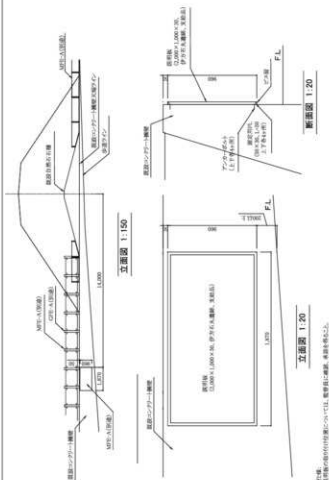
日本郵政附圖 1:10

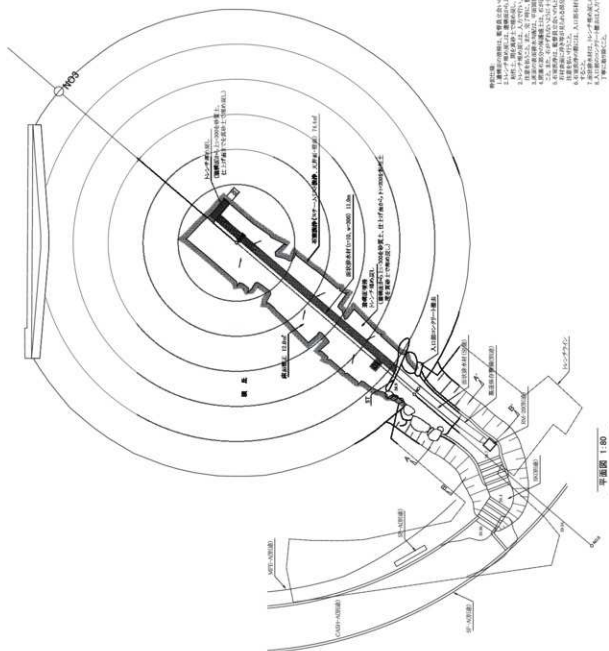
說明板-B / SB-B



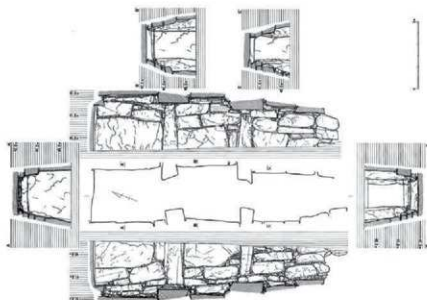
1. 原平国は、假設文字を除去し、漢語も付くこと。
2. 民間流通の内部については、筆写者より文章の假名を消せること。

工程名称	伊方古墳整備工事					
調査名称	詳細図 3					
種 尺			圖 示		版 数	
工事年月日	年 月 日					
備 註	添	附	計			
方 城 町						





第20図 平成16年度伊方古墳整備工事実施図11

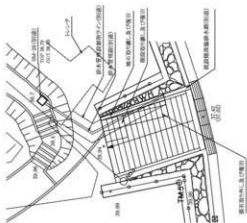


石室寶樹園

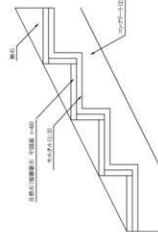
[illegible]

工程名称	伊方古墳整備工事									
取組名称	野間田 6									
種 尺	規 尺		規 示		日		圖		書	
工事年月日	年		月		日		図		書	
備 註	図		計							
方 城 町										

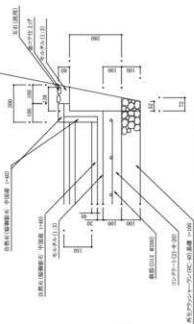
既設階段一時撤去及び復旧



平面图 1:100



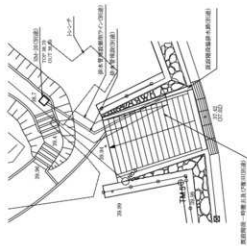
復旧断面図 1:10



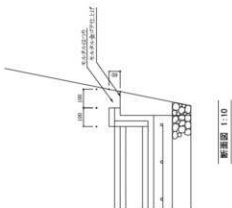
復旦新書 1:10

① 土地の所有に關しては、現地の慣習に合つて行ふこと。
 ② 農民組合と地主組合の設立は、エンゲル・アムス……(租税)を前提とし、
 ③ 徴金部分と、
 ④ 徴金の取り分は、目録面で行ふこと。
 ⑤ 所有は、徴金部分に合つて行ふものとし、使用にあつては監督員にサング
 本を提出し、使用面を受けること。

既設階段臨排水路



比例尺 1:100



斷面図 1:10

シミュレーションは、丁寧にはつづける、金で手て表面を平準に引き上げること。

工 程 名 称		伊方古墳整備工事			
図 面 名 称		詳細図 Ⅱ			
縮 尺		図 示		縮 小	
工事年月日		年 月 日			
清	図	設	計		
方 城 町					

図 版



1. 平成 15 年度整備工事着工前



2. 平成 15 年度整備工事竣工



3. トレンチ埋め戻し状況 1 層目 (真砂土)



5. 填丘盛土混合土配合状況



4. トレンチ埋め戻し状況 2 層目 (現地発生土)



6. 填丘盛土充填状況



1. 墳丘盛土転圧状況



2. 墳丘法面整形状況



3. 墳丘法面整形状況



4. 墳丘頂部整形状況



5. 平成 16 年度工事正面着工前



6. 平成 16 年度工事正面竣工



7. 平成 16 年度工事裏側着工前



8. 平成 16 年度工事裏側竣工



1. 墳丘頂部遮水シート敷設状況



2. 墳丘頂部粘性土充填状況



3. 石室内面上排水材敷設状況



4. 石室内床面整形状況



5. 石室内洗浄状況



6. 閉塞部埋め戻し状況



7. 墓道部吸出防止材敷設状況



8. 墓道部面上排水材敷設状況



1. 墓道部麻土囊積状況



2. 墓道部土系弾性舗装施工状況



3. 墓道部進入階段床掘状況



4. 墓道部完了



5. 石室入り口部扉ベースコンクリート設置状況



6. 石室入り口部扉設置完了



7. 石室入り口部整形状況



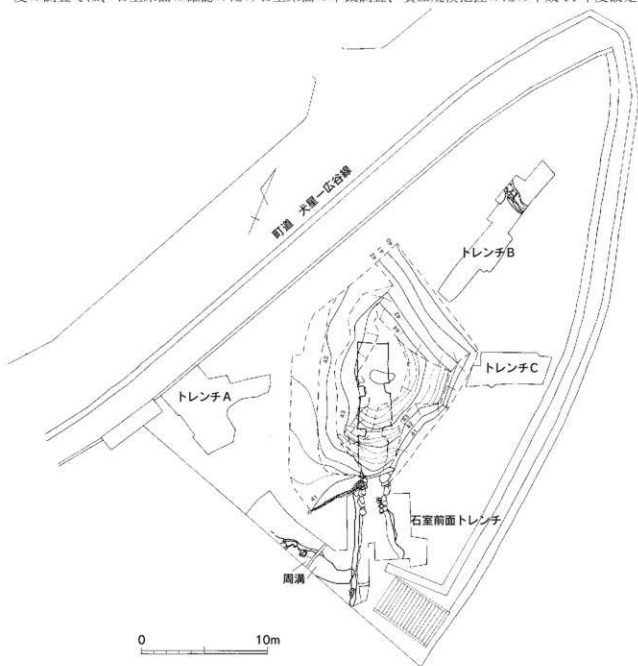
8. 石室入り口部整形完了

Ⅳ．調査の記録

1．調査の経過と調査の方法

伊方古墳は平成9年に調査が行われ、石室の実測図と墳丘の実測図が公開された（方城町文化財調査報告書第5集）。その後、保存整備の計画に伴い前回調査で未確認の石室床面と墳丘規模の再確認のため事前調査を行うこととなった。調査は平成15年1月20日～3月31日まで、追加調査を平成15年9月22日～1月30日まで行った。

調査の方法であるが、保存整備に向けた事前調査であるため墳丘規模把握のための周溝確認、石室構造の確認のための石室床面の確認、石室入り口部の構造把握のための墓道部確認の3点を目標にした。平成14年度の調査では石室入り口部前面にトレンチを設定して調査を行った。平成15年度の調査では、石室床面の確認のため石室床面の半裁調査、墳丘規模把握のため平成14年度設定



第25図 伊方古墳遺構配置図 (1/300)

のトレンチを拡張するとともに新規にトレンチを3本設定し掘り下げを行った(第25図)。

記録は、墳丘、石室は前回調査時の図面に追加する形でを行い、墳丘周辺は開発が進んだため1/100で平板測量(第25図)を行った。各トレンチは1/20で実測図を作成し、遺構は部分的に1/10で実測図を作成した。また、今回の報告では新たに判明した部分を中心に報告し、既調査の部分については方城町文化財調査報告書第5集を参照されたい。

2. 遺構と遺物

(1) 石室前面トレンチ(第26図、図版10、11、12、13)

平成14年度の調査で石室前面約5m×5mの範囲でトレンチを設定し、4区画に分割し掘り下げを行った。その結果、縦断土層、横断土層で後世のかく乱を受けていない層と墓道、閉塞石を確認した。その結果を受け平成15年度は石室前面トレンチを縦断ベルトの東側を南に拡張し、墓道部の確認を行った。後述するが、墳丘の外側に設けたトレンチA、B、Cで明確な周溝が確認できなかったため南拡張部の西側を敷地内いっばいに拡張し周溝の検出に努めた。結果溝状に残る周溝の一部と、墓道に接続する周溝の痕跡を確認した。

墓道

奥壁から閉塞石の基底面が確認できる地点13.4m付近から20.4m付近までの間で検出した。閉塞の前面で底部幅2.1m、上部で幅3.3mを測り、東側に湾曲する。構造は閉塞石の手前で墓道は一段下がり、西側では18.7m付近で一段上がる。この後者の1段上がる部分は終点に近い部分であろう。

地山は下部の白色粘土の上に橙褐色土の堆積層が見られる。墓道は、橙褐色の堆積層を掘り込み、縦断土層、横断土層で見られる25層により整地され形成される。

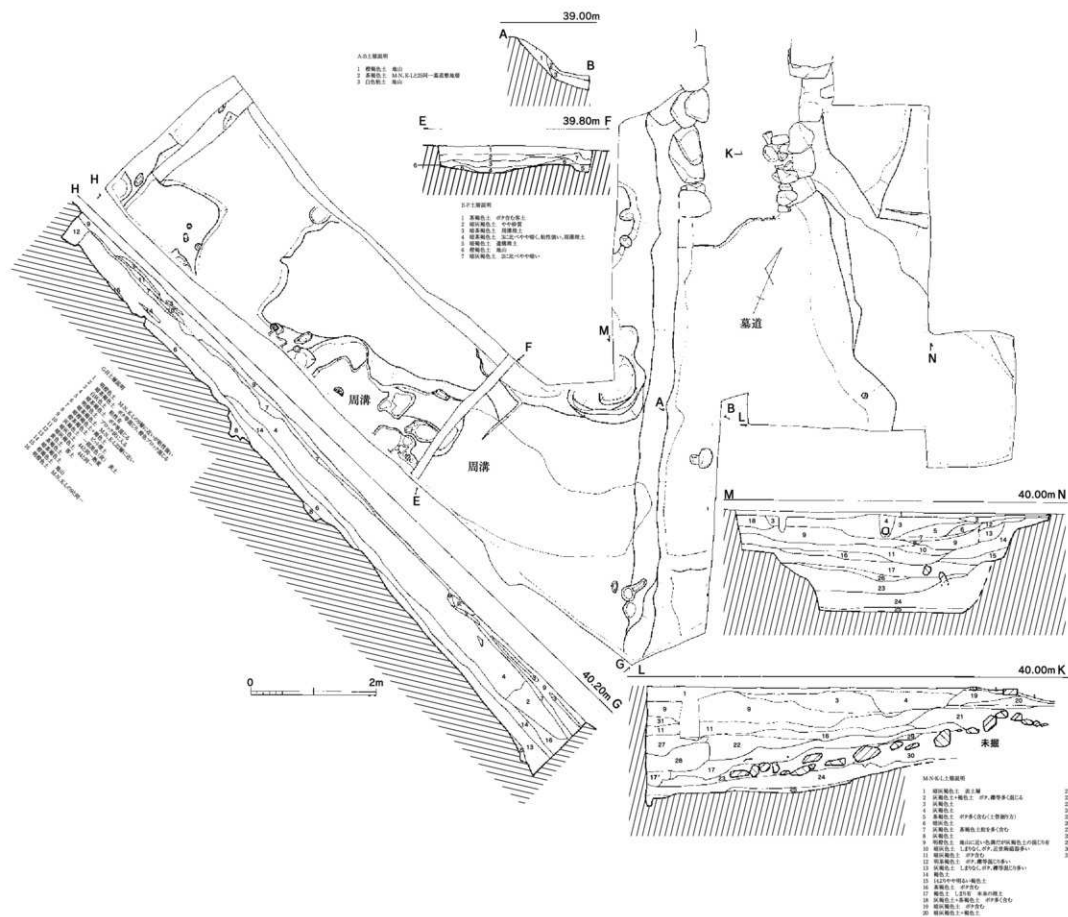
周溝

西側拡張部で溝状の遺構を検出した。石室の中心から半径16mの地点、墓道の西側の肩から3.6m付近である。この溝状遺構の東側で検出した溝の延長は明確には確認できなかった。後世の造成により削平されたことが原因と考えられた。ただし、地山上に溝に続く褐色に変色した部分が確認でき、墓道につながっていた。この変色した部分は溝の底部と考えられ、状況からこの墓道に接続する溝を周溝と判断した。検出した周溝からの出土遺物はない。

縦断土層・横断土層

17層とした褐色土より上部に堆積した層は、16層などにボタ等が混入する。このことから付近に炭鉱住宅を建設する際に客土として持ち込まれたと推定できる。閉塞石上の21層は石室内の17層、9層に続くかく乱に伴う土であろう。

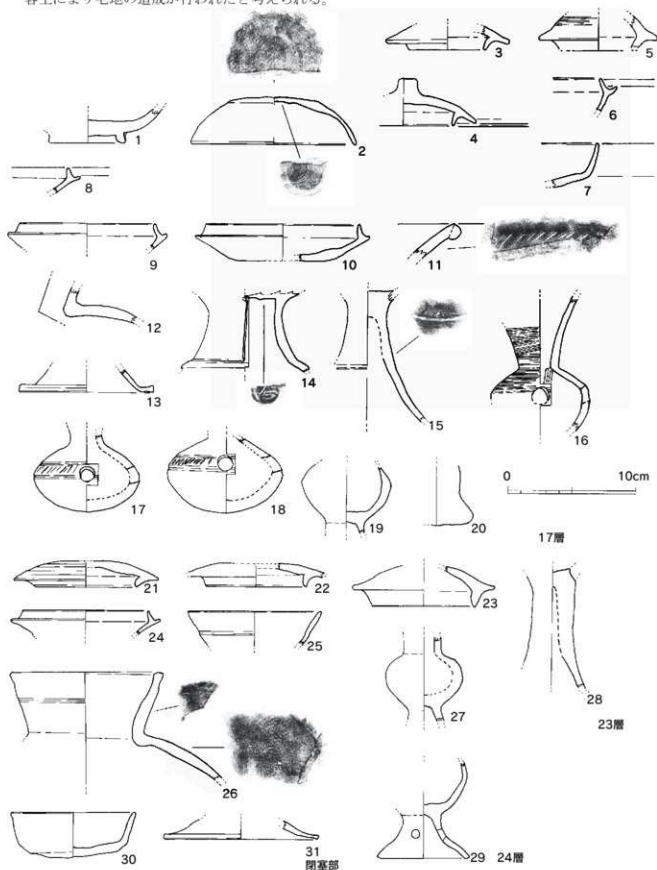
17層から下の層は、古墳時代に堆積した層と考えられる。遺物は須恵器、土師器がほとんどを占める。また、この17層上からは青磁碗の破片が出土し、一定期間地表上にあったと推定される。23層中では転石を多く確認した。出土する遺物には時期差が見られ、転石を閉塞石と考えるなら追葬等の行為に伴う層であろう。24層は遺物は初葬時に近い床面、25層は遺物を含まないため墓



第26図 石室前面トレンチ実測図 (1/60)

道整地層と考えられる。このことは墓道部のA-Bで行った土層観察からも確認できる。

西側拡張部の土層状況は周溝の直上まで客土であり、若干整地され、埋め立てられたことが確認できる。横断土層では墓道肩にわずかに17層が確認できる。17層上で整地作業が行われ、その後客土により宅地の造成が行われたと考えられる。



第27図 石室前面トレンチ出土遺物実測図1 (1/3)

出土遺物（第27図、28図、36図、図版20、21、23）

1から20は17層出土遺物である。1は青磁碗である。高台は削り出し、内面見込みと内壁に文様を施す。軸は比較的厚く、焼成は良好である。胎土は精緻であり、器壁は青緑色を呈し、断面は灰色を呈する。

2から18は須恵器である。2、3、4は坏蓋、5は壺か何かの蓋であろう。2は天井部ヘラ切り後粗いナデ、体部から内面はヨコナデ調整を施す。天井部外面にタタキ、内面に当て具痕が残る。焼成は良好であり、胎土はやや粗い。内外面淡灰色を呈する。3は受け部と返りに部分が残存し、内外面ヨコナデ調整を施す。焼成は良好であり胎土はやや粗い。内外面暗灰色を呈する。4はつまみのつく蓋である。天井部はつまみ貼り付け後ヨコナデ調整、肩部に回転ヘラ削り、受け部から内面にかけてヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ調整を施す。焼成は堅緻であり、胎土は粗い。内外面暗灰色を呈する。5は肩部に回転ヘラ削り後カキメ調整、他の部分はヨコナデ調整を施す。口縁端部は打ち欠かれたような痕跡がある。焼成は良好であり、胎土は精良である。内外面暗橙色を呈する。

6から10は須恵器の坏身である。6、8は受け部から立ち上がりまで残存し、内外面ナデ調整を施す。ともに調整は良好であり、胎土であるが6は粗く、8は精良である。焼成は良好であり、6は内面灰色、外面灰褐色、8は暗灰色を呈する。7は立ち上がりを持たない坏身であり外面底部はヘラ切り未調整、口縁部と底部の境目はヘラ切り後にナデ調整を行う。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内面は不定方向のナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は精緻である。内外面淡灰色を呈する。9の底部はヘラ切り後ナデ調整、底部との境目に一条のヘラ削りを施し、他の部分はナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は粗い。内面は灰色、外面は暗灰色を呈する。

6は甕の口縁部である。外面にはヘラ描きによる斜文が見られ、他の部分はヨコナデ調整を施す。口縁端部は折り返しにより整形される。焼成は堅緻であり、胎土は粗い。内面黒灰色、外面灰褐色を呈する。12は平瓶の肩部から頸部の破片である。外面はカキメ調整、内面はヨコナデ調整、頸部と体部の境はナデ調整を施す。焼成は良好であり、胎土はやや粗い。内外面灰色、部分的に黄灰色を呈する。

13から15は高坏の脚部である。いずれも内外面ヨコナデ調整を施し、14では坏部外面底部にヘラ記号があり、透かしの痕跡が見られる。13、14は焼成良好、15は堅緻である。胎土であるが13は精緻であり、14は比較的精良、15は粗い。13は内外暗灰色、14は内外灰色、一部黄灰色、15は軸のためか灰褐色を呈する。

16から18は甕である。16は頸部から体部にかけて17、18は体部のみ残存する。16の外面は体部中ほどに一条の沈線がめぐり、体部上半から頸部にかけてカキメ調整、体部下半は回転ヘラ削りを施す。内面は確認できる部分ではヨコナデ調整を施す。17、18は外面体部中ほどに二条の沈線をめぐらし、その間にヘラ描きの斜文を施す。その文様から上半はヨコナデ、下半は不定ナデ調整を施す。16、18の焼成は堅緻であり、17では良好である。胎土は16では精良、17は比較的精良、18はやや粗い。16は内面灰色、外面黒灰色、17、18は外面のみの観察であるが17は灰色、18は暗灰色を呈し17、1ととも一部黒灰色を呈する。

19、20は土師器である。19は小型の脚坏壺であり、外面の調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整を施す。焼成は良好、胎土はやや粗い。黄褐色を呈する。20はミニチュアの器台と考えられる。

調整は不明瞭、中実で整形される。焼成は良好、胎土は粗い。暗橙色を呈する。

21 から 28 は 23 層出土遺物である。21 から 26 は須恵器である。21、22 は蓋である。ともに天井部外面はナデ、天井部との境付近回転ヘラ削り、他の部分はヨコナデ調整を施す。21 は内面天井部に一部不定方向ナデが確認できる。焼成はともに良好、胎土は 21 では精良、22 はやや粗い。21 の内面は灰褐色、外面黒灰色、一部灰色、22 は内外面青灰色を呈する。23 は壺か何かの蓋であろう。天井部はカキメ、他の部分はヨコナデ調整を施す。焼成は不良であり、胎土は精良である。暗橙色を呈する。

24 は坏身である。内外面ヨコナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は精良である。内面黄灰色、外面灰色を呈する。

25 は高坏の坏部である、外面体部中ほどに一条の沈線をめぐらし、内外面ヨコナデ調整を施す。焼成は堅緻であり、胎土はやや粗い。内外面暗灰色を呈し、一部黒灰色を呈する。

26 は平瓶の口縁部から肩部にかけての破片である。外面肩部はタキ後カキメ、口縁部から内面はヨコナデ調整を施す。焼成は堅緻であり、胎土はやや粗い。内面暗灰色、外面黒灰色、部分的に暗灰褐色を呈する。

27、28 は土師器である。27 は小型の脚坏壺であり、外面の調整は肩部と体部中ほどからやや底部よりカキメ調整を施す。焼成は良好、胎土はやや粗い。暗黄褐色を呈する。閉塞部にかかる 23 層中の出土である。28 は高坏の脚部である。調整は不明瞭である。焼成は良好、胎土は粗い。橙褐色を呈する。

29 は 24 層出土の小型の須恵器脚坏壺である。体部が 1/3 ほどしか残存せず、脚坏の腿の可能性もある。内外面ヨコナデ調整、体部下半に不明瞭であるがカキメ調整を施す。脚部には円形の透かしが入る。焼成は良好であり、胎土はやや粗い。暗灰色を呈する。

30、31 は閉塞中より出土した遺物である。30 は須恵器坏身である。外面底部はヘラ切り未調整、他の部分はヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は精良である。青灰色を呈する。

31 は土師器の高坏脚端部である。調整は不明瞭である。焼成はやや不良であり、胎土はやや粗い。橙褐色を呈する。

第 28 図の 32 から 53 は 17 層より上部で検出した遺物である。32、33 は陶器である。32 は蓋である。天井部に透かしがあり、天井部はカキメ状の文様とくし描きによる文様を施し他の部分は内外面ヨコナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は精緻、暗茶褐色を呈する。33 は鉢である。口縁を肥厚させ、外面体部下半は削り調整、上半から内面にかけて白褐色の釉をかける。焼成は良好、胎土はやや粗い。34 は磁器の碗である。全体に施釉され、畳付の部分のみ釉がかからない。外面は染付けによる文様、内面見込み中央には壽と見える文字が書かれ、口縁部に二条、見込みに一条の線がめぐる。焼成は良好、胎土は精緻である。

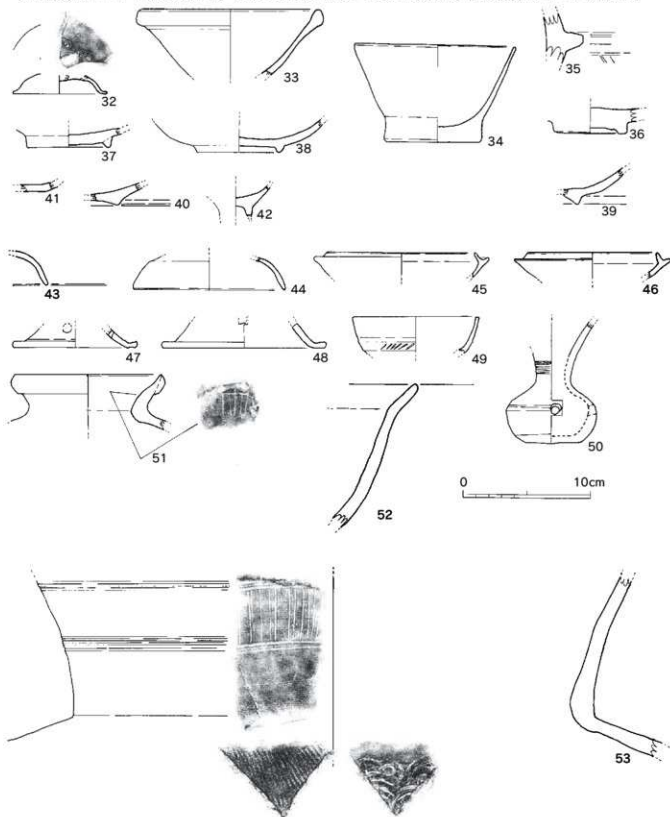
35 は滑石製の石鍋である。仕上げは粗く、削りの跡が残る。36 は青磁碗の高台である。高台は削り出し、高台外面まで青緑色の釉がかかる。断面は灰色である。焼成は良好、胎土は精緻である。

37 から 40 は瓦器碗である。37 の高台は貼り付けて整形され、貼り付け後高台内面と外側にヨコナデ調整を施す。38、39 の調整は不明瞭だが確認できる部分ではヨコナデ調整を施す。40 は外面ヨコナデ、内面ナデ調整を施す。いずれも焼成は良好であり、胎土はやや粗い。37 は内外面黄灰色、38 は内面淡灰色、外面黒灰色、39 は内外面黄灰色、外面一部暗灰色を呈し 40 は内面黄褐色、外面

暗灰色を呈する。

41、42は土師器である。41は土師器皿である。底部はヘラ切り、他の部分の調整は不明瞭である。焼成は良好、胎土はやや粗い。黄橙色を呈する。42は小型の脚坏壺であり、調整は不明瞭だが脚部内面はヨコナデ調整を施す。焼成は良好、胎土は粗い。暗黄橙色を呈する。

43から51、53は須恵器である。43、44は坏蓋である。44の天井部外面はヘラ切り後ナデ調整、他の部分はヨコナデ調整を施す。44の天井部外面はヘラ切り未調整、他の部分はヨコナデ調整を



第28図 石室前面トレンチ出土遺物実測図実測図2 (1/3)

施す。焼成は43ではやや不良、44は良好であり、胎土は43では粗く、44はやや粗い。43は黄灰褐色、44は灰色を呈する。

45、46は坏身である。いずれも内外面ヨコナデ調整を施す。いずれも焼成は良好、45の胎土は比較的精良、46の胎土はやや粗い。45は淡灰色、46は内面黄灰色、外面灰色を呈する。

47、48は高坏の脚端部である。いずれも内外面ヨコナデ調整を施し、47は円形、48は方形の透かしの痕跡が残る。焼成は47では良好、48は堅緻であり、胎土は47では精良、48は比較的精良である。47は内面黄灰色、外面灰色、48は内面灰色、外面暗灰色を呈する。

49、50は甕である。49は口縁部の破片であり、二条の沈線とその間にくし描きによる文様がある。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は堅緻であり胎土はやや粗い。黒灰色を呈する。50は底部外面から胴部下半に回転ヘラ削り、胴部中ほどから内面の確認できる部分までヨコナデ調整を施し頸部の下部はカキメ調整を施す。胴部中ほどに一条の沈線がめぐる。焼成は堅緻であり、胎土は精良である。灰色を呈する。

51、53は甕である。51は小型品で内外面ヨコナデ調整、肩部に当て具痕が残る。口縁部内面にヘラ記号がある。口縁端部は折り返しにより整形される。焼成は堅緻であり、胎土は粗い。内面暗灰色、外面黒灰色を呈する。53は大型の甕で頸部はカキメ調整の後、上二条、下三条の沈線で区画されるヘラ描きによる文様、上部の沈線の間には刻み目を施す。頸部内側にはヨコナデ調整を施す。肩部には外面に平行タタキ、内面に青海波文の当て具痕が残る。焼成は良好であり、胎土は精良である。黒灰色、部分的に灰色を呈する。

52は土師器である。口縁部はかなり外傾し、鉢状の器形になると考えられる。調整は不明瞭である。焼成は良好、胎土は粗い。内面橙褐色、外面は煤が付着し黒灰色、下部は暗橙褐色を呈する。

第36図1は石鐏である。両側縁は丁寧に剥離が行われているが、剥離は大きく未製品の可能性もある。下部は欠失している可能性がある。姫島系黒曜石を使用する。

2は丸玉である。黒色を呈し材質は木質あるいはボタと考えられる。

3から5は鉄釘である。形状から棺釘の可能性もある。釘の頭は折り曲げ整形される。

(2) 石室（第26図、図版5、6、7）

前回の調査では全長11.6mの3室構造の横穴式石室と報告されている。今回石室の右側部分を半裁調査を行い、床面まで掘り下げた。その結果、閉塞石の終点を検出し、羨道部の状況が確認できた。確認した状況から考え、従来前室と位置づけられていた部分は羨道部分であり、3室構造を意識した可能性があるものの厳密には複室構造の横穴式石室である。

石室の全長は今回検出した前庭部まで含めると13.82m、天上石のかかる部分までで10.5mを測る。高さは、玄室の敷石が残る部分で約2.9mである。奥壁部分には擬似石棚がある。

玄室

玄室中央と玄門部ベルトを残し掘り下げを行った。床面は激しくかく乱を受け、玄室中央付近は土坑状に掘削されていた。右側壁に接する部分で1列のみ敷石を検出した。現状の床面より0.5mほど下がり標高39.0m前後であり、この高さが本来の床面の高さであろう。かく乱が激しく二次敷石等は確認できなかった。

床面の構造であるが、敷石は地山である白色粘土の上に薄く褐色土を敷き置かれていた。敷石の

残存する部分では天井までの高さは石室の中央部で2.94 mである。

玄門部では標高39.15 m付近で、框石を検出した。玄室奥壁から、3.43 mの地点である。框石も敷石同様褐色土を用い固定される。玄室床面とは同一レベルではなく、一段高くなる。

隅部の状況であるが、半裁調査のため右側壁部分でのみ確認を行った。玄室側壁は奥壁を挟み込むように設置され、玄門部側では袖石にあたるように設置されている。石材は明確な掘り方は確認できず地山上に墓坑を掘り、墓坑の床面上に石材を据えている。墳丘本体にトレンチを設定していないため裏返の状況は不明である。

墓坑であるが、底面の標高は38.9 m前後であり。地山レベルとの比高差は0.8 mほどである。この高さが石室部分の墓坑の深さであろう。

出土遺物は原位置を保つものではなく、埋土のかく乱土中より出土している。遺物は近世以後の遺物が多く、表層付近ではプラスチック製のゴミも多く含まれている。4層中よりすり鉢片(第30図1)を検出している。

前室

玄室同様中央部と前門部にベルトを残し掘り下げを行った。床面は激しくかく乱を受け、敷石として原位置を保っていた石材は2つである。その敷石の隙間より青銅製の八角鈴が出土している。他の石材は埋土中に浮いた状態で検出している。床面は地山に達するまでかく乱を受け羨道よりでは転石が多い。

出土遺物であるが、先述の鈴と縦断土層中で金銅製の辻金具が出土している。馬具の出土する状況から見てこの前室が埋葬空間として利用された可能性が考えられる。

羨道

中央部にベルトを残し掘り下げを行った。奥壁より8.9 m付近で閉塞石の終点を確認した。前回調査時3室の前室袖とされた部分より奥壁よりであり、この部分は部屋として利用されず羨道部と考えられる。羨道部も激しくかく乱を受け、閉塞石のものと見られる転石が多く見られた。羨道部で確認した閉塞石は奥壁から13.4 m付近まで確認できる。

閉塞石

閉塞石は奥壁より8.9 m付近から13.4 m付近まで残存を確認した。羨道部では現状の床面から0.2 mほど下がった位置で確認でき、進入の妨げになる部分を取り外されたと考えられる。

使用石材は塊石を主体とし、墓道部の縦断土層(第29図)で確認した33層が間に充填される。この閉塞石の隙間から第27図の30、31が出土した。

縦断土層(第29図、図版8、9)

奥壁より閉塞部まで半裁した壁面で土層観察を行った。表層は5層と15層で直下に焚き火の痕跡も伺える。出土遺物は近世以後のものがほとんどであり最近堆積したと考えられる。

玄室では3、3'、4層のように暗い橙色の埋土が框石から奥壁にかけて堆積していた。この層中より土坑状の掘削が行われていた。土坑状の遺構埋土は4層で3、3'層とほぼ同じであり同時期に堆積したと考えられる。

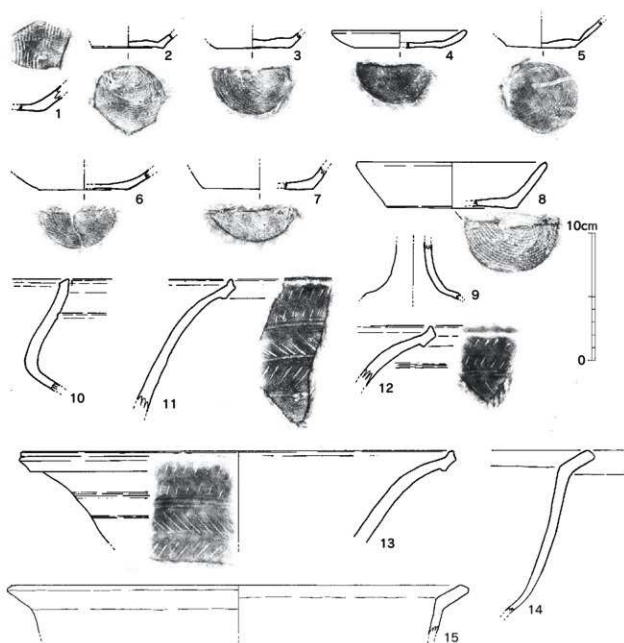
羨道から前室では3rd層を切るように9層が堆積する。この9層中からは土師器皿が多く出土する。3、3rd、4層以後堆積したと考えられる。9層の下部では19層や12層が確認でき3、3rd、4、9層以前に床面までかく乱行為が及んだと考えられる。12層中で転石が多く見られることからこの層が初期のかく乱行為を示すものと考えられる。

12層下部に墓道24(25)層に続くと考えられる層があるが、不明瞭であり断定できない。

横断土層 (第2図、図版8、9)

半裁した壁面の直行する形で鯨-B、C-D、E-F、G-H、I-Jの5本のベルトを設定し土層観察を行った。A-Bのベルトでは4層の掘り込みが地山まで及びブロック状に入る7層が4層中に見られる。この7層は木棺等の痕跡と推定され、古墳が墓として転用されたと考えられる。

E-Fでは12層の堆積は薄い、G-H、I-Jでは比較的厚く12層上に転石が見られ、閉塞石の上を歩き人が侵入した痕跡が認められる。床面の敷石等が残らないことから、追葬等の行為によるものとは考えがたく先述したように初期のかく乱の痕跡であると考えられる。

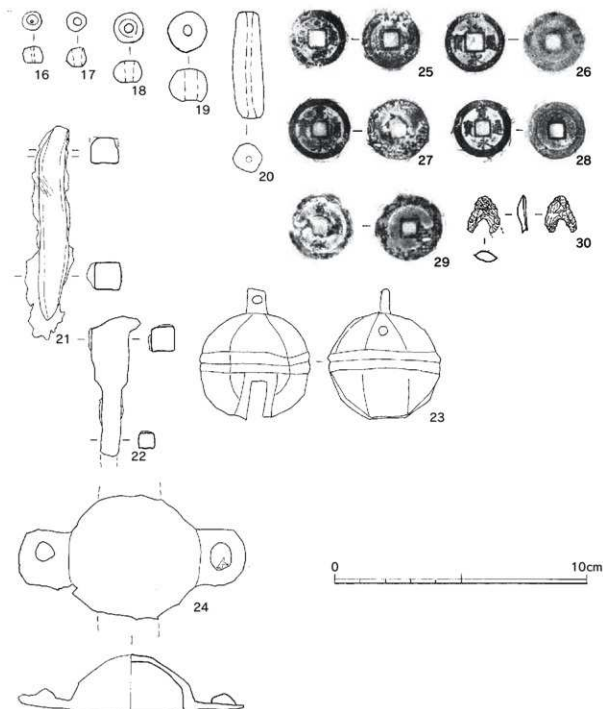


第30図 石室内出土遺物実測図1 (1/3)

出土遺物 (第30図、31図、図版22,23)

第30図1は素焼きのすり鉢片である。玄室の土坑状遺構の埋土中から出土した。態度は比較的精良であり、内面は黄灰色、外面は灰色を呈し焼成はやや不良である。外面はヨコナデ調整を施す。

2から8は土師器皿である。2から8共に底面は糸切りであり、他の部分はヨコナデを施す。焼成はすべて良好であり、5は陶器に近い。胎土は5、6、7は精良であり、3は比較的精良、4、8はやや粗く、2は粗い。2は内外明黄橙色、3は内外黄橙色、4は内外橙色、5は明黄灰色、6は内面黄灰色、外面暗黄灰色、7は内外暗褐色、8は暗橙褐色を呈し色調はやや異なる。4のみ工事中石室の排土から検出したが、他はすべて前室の埋土中から出土している。縦断土層に見られる9層のかく乱の時期を示すものと考えられる。



第31図 石室内出土遺物実測図2 (2/3)

9から11は須恵器である。9は高坏脚部片で坏部、脚端部が欠失し、中ほどに一条の沈線を施し残存部では内外面にヨコナデを施す。焼成は堅緻であり、内外面青灰色を呈し、胎土は粗い。10は平瓶の頸部である。頸部中ほどに一条の沈線をめぐらし、肩部付近はカキメ調整、他の部分はヨコナデを施す。内外面ともに暗青灰色を呈し、焼成は堅緻であり胎土は粗い。11から13は甕の口縁部片である。11は前室埋土、12は羨道埋土、13は前室の床面で検出した。いずれも沈線とくし描きによる文様があり他の部分はヨコナデ調整を施す。13では部分的にカキメが見える。焼成はすべて堅緻であり、胎土はやや粗い。11、13は内外面ともに黒灰色であり、11は外面で部分的に暗灰色を呈する。12は暗青灰色を呈する。

14、15は土師器である。14、15ともに口縁部、胴部が外傾し甕というより鉢に近い形態を呈すると思われる。14内外面ともに削りが見られ、口縁部はヨコナデ調整を施す。15は内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成はともに良好であり、14は粗いが15はやや粗い程度である。14は外面黒灰色、部分的に暗灰色、内面は黄灰褐色、部分的に黒灰色を呈する。15は外面は黒灰色、内面は黄灰色を呈し、外面には部分的に煤が付着する。

第31図の16から19は玉類である。16は小玉で材質はガラスと考えられる。青色透明で石室の排土中から検出した。17は羨道部で検出した小玉である。黒色で材質は木材と考えられる。18は緑色透明の小玉である。材質は不明であるが、石材と考えられる。19は丸玉である。黒色を呈し材質は木質あるいはボタと考えられる。18は前室のかく乱土中、19は羨道のかく乱土中から検出した。

20は土錘であり前室の埋土中より出土した。暗黄橙色を呈し、かく乱が行われた際土砂とともに持ち込まれた物であろう。

21、22は鉄釘である。21は羨道部、22は玄室で検出した。形状から棺釘の可能性もある。21は表面に木質が残る。

23は青銅製の八角鈴である。馬具と考えられ、前室の敷石の隙間から検出した。24は、鉄地金銅張の辻金具である。前室の半截を行った壁面で検出した。

25から29は寛永通宝である。少しずつ形態が違い、時期差も考えられる。この時期に再び石室内への侵入が頻繁に行われたと考えられる。この他にも石室内からは近代貨幣も出土している。

30は玄室埋土から検出した石鏃である。一部欠失する。側縁は丁寧な剥離が行われ、姫島系黒曜石を使用する

(3) トレンチA (第32図、図版13、14、15)

墳丘範囲確認、伊方古墳の伴う遺構確認のため設定した。当初計画では墳丘西側で主軸に直行するよう設定したが、指定地内の状況から主軸直行ラインから南へ30°ほど振れて掘削を行った。遺構の状況に応じて順次拡張を行い、A-B間で土層観察を行った。

トレンチAでは直接伊方古墳に関係する遺構は検出できなかった。主な遺構は弥生時代と考えられる、土坑数基、ビット多数と弥生時代中期ごろの甕棺墓（小児棺）である。土坑は大きく2種類検出した。D-1のように楕円形プランで弥生土器の破片を出土する廃棄土坑と考えられるものと、D-2、D-3のように方形プランで遺物の出土がないものである。後者は指定地西側で道路建設時に調査された伊方石丸遺跡に続く墓地と考えられる。今回の調査目的より外れるため、甕棺墓、遺物出土遺構以外は完掘していない遺構もある。それらの遺構は現状保存し埋め戻しを行った。

土層状況

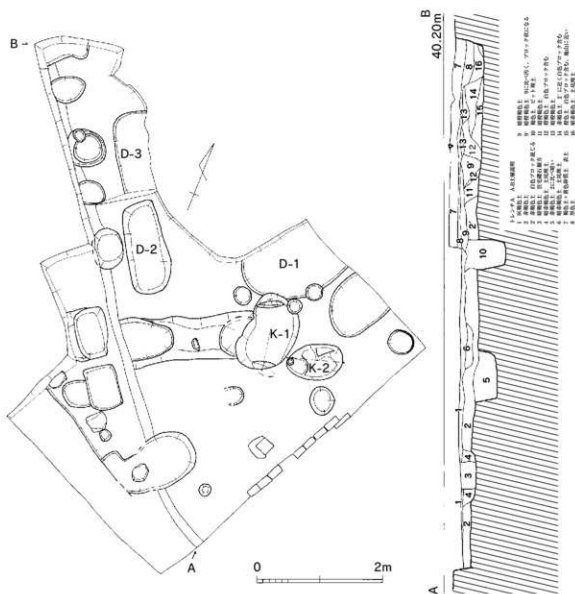
表土下0.2mほどで1層の灰褐色土と9層の暗橙褐色土の層が入り、これらの層を除去後弥生時代の遺構面を確認した。弥生時代の遺構面は5層のように下層に掘り込まれた遺構もあることから遺構面が2層存在する可能性がある。土層観察の結果からも古墳に直接伴う遺構は検出できていない。

甕棺墓K-1（第33図、図版13、14）

トレンチの南側拡張部で検出した小型の甕棺墓である。上部は削平を受ける。上縁長軸1.2m、短軸0.8m、深さは東側で0.6m、西側で0.4mを測り、不整な楕円形プランを呈する。主軸方位はN-80°-Eである。出土した甕棺は単棺で、蓋石等は伴っていない。墓域内で副葬品と考えられる小型の鉢が出土している。

出土遺物（第34図、図版22）

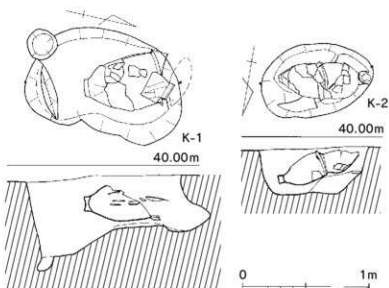
1、2は弥生土器の甕棺である。本来は同一固体である。口径40.4cm、底径11.6cmで日常容器を甕棺に転用したものであろう。底部外面はナデ調整、胴部にはハケメ調整を施す。口縁下部には



第32図 トレンチA実測図（1/60）

三角形の突帯を貼り付け、外面の突帯部分から内面にかけてナデ調整を施す。焼成は良好であり、胎土は比較的精良である。暗橙色を呈する。

3は小型の弥生土器鉢である。口縁下部に焼成前の穿孔があり外面はハケメ調整とナデ調整、内面はナデ調整を施す。焼成は良好、胎土はやや粗い。内面黄橙色、外面暗橙色を呈する。

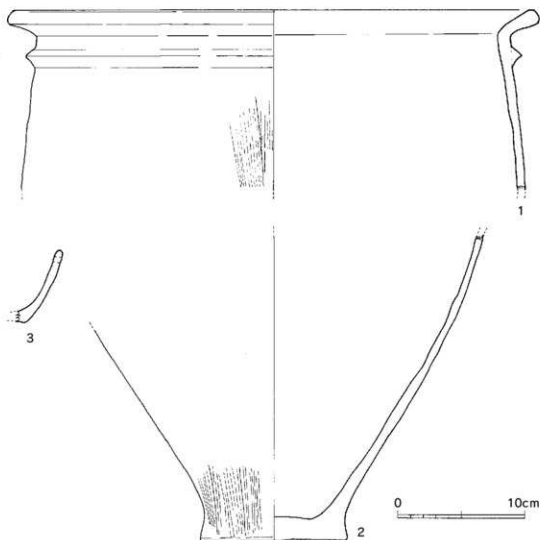


甕棺墓 K-2 (第33図、図版13、

第33図 トレンチAK-1・K-2実測図 (1/30)

14)

トレンチの南側拡張部で検出した小型の甕棺墓である。上部は削平を受ける。上縁長軸0.88m、短軸0.55m、深さは北側で0.2m、南側で0.35mを測り、長楕円形プランを呈する。主軸方位はN-27°-Wである。出土した甕棺は合わせ口式の小型の甕棺である。副葬品はない。



第34図 トレンチAK-1出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第35図、図版23)

1、2は弥生土器の甕棺である。本来は同一固体である。口径29.8cm、底径8.2cmで日常容器を甕棺に転用したものであろう。胴部外面はハケメ調整、他の部分と内面はナデ調整を施す。内面底部には指頭圧痕が残る。焼成は良好であり、胎土はやや粗い。黄灰色を呈する。

3、4は弥生土器の甕棺である。本来は同一固体である。口径30.2cm、底径7.2cmで日常容器を甕棺に転用したものであろう。底部外面はナデ調整、胴部外面はハケメ調整、他の部分と内面はナデ調整を施す。内面底部には指頭圧痕が残る。焼成はやや不良であり、胎土は粗い。内面下部は黒灰色、他の部分は黄橙色を呈する。

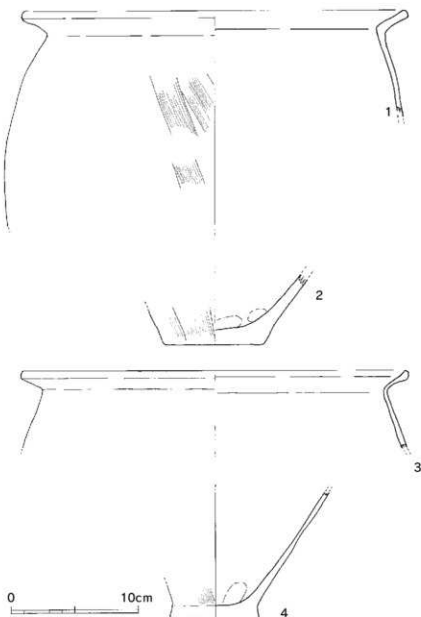
その他の出土遺物 (第36図、図版23)

6は鉄釘である。トレンチAの埋土より出土した。釘の頭は折り曲げ整形であり。形状から棺釘の可能性もある。

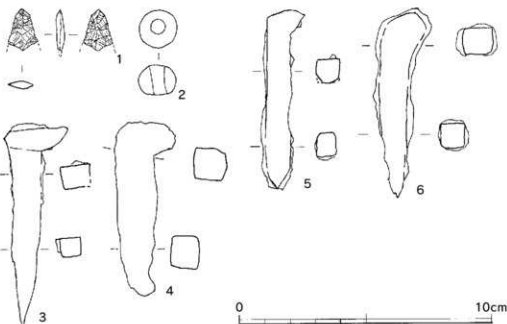
(4) トレンチB (第37図、図版15、16)

墳丘範囲確認、伊方古墳の伴う遺構確認のため墳丘裏側に設定した。指定地内の状況から主軸直行ラインから西へ40°ほど振れて掘削を行った。遺構の状況に応じて順次拡張を行い、A-B間で土層観察を行った。

検出遺構であるが、方形プランの掘り込みをトレンチ中ほどで確認した。遺物等はなく、用途等不明である。その他土留めのための石垣と溝を検出した。



第35図 トレンチAK-2出土遺物実測図 (1/3)



第36図 石室前面トレンチ・トレンチA出土土器・玉・鉄器実測図 (2/3)

土層状況

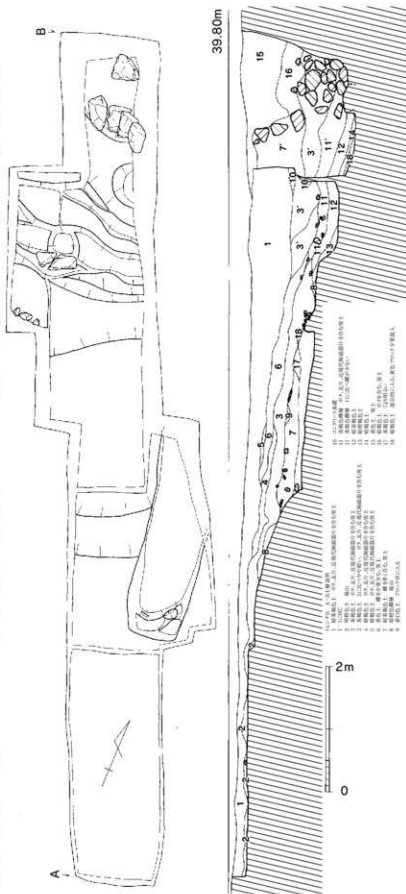
Aより3.6m付近までボタ、近現代の陶磁器片を多く含む表土が0.2mほど堆積し、その下部に地山を検出した。一度削平を受けており、墳丘の痕跡等は確認できなかった。その先4m付近から地山は急激に下がり、Aより6m付近で標高38.6m付近まで落ち込む。この付近では明橙色土の地山ではなく暗橙色の礫層が地山となる。この地山直上まで客土が堆積し削平を受けている。Aより9.5m付近で客土の下部に暗茶褐色土の堆積が認められた。平面で確認した溝状の遺構に対応する。この層はただらと落ちて行き石垣状の遺構まで続く。石垣状の遺構の先は客土が充填され、最近低い部分を埋め立てた状況が確認できる。

溝状遺構

Aより9.5m付近、石室のセンターから17m付近で溝状の遺構を確認した。石室前面トレンチで確認した周溝と位置的にややずれ、標高差は底部で約1mである。この溝状の遺構は平成15年度の工事時、埋め戻し前に西側で延長部分を確認している。この溝状遺構の埋土はトレンチ上部の埋土と違い、ゴミ等が混じっていない。

(5) トレンチC (第38図、図版17、18)

墳丘範囲確認、伊方古墳の伴う遺構確認のため墳丘東側に設定した。主軸直行ラインを中心にして掘削を行った。遺構の状況に応じて順次拡張を行い、A-B、C-D間で土層観察を行った。古墳に伴う遺構は確認できなかった。出土遺構はビット多数と方形のトレンチ状の遺構、幅2.2mほどの溝状遺構である。ビット群は上下2層有り、溝状遺構は下層で検出した。これらの遺構の時期は遺物がなく不明であるが、上下2層に遺構面が分かれることからトレンチAの状況に似る。このことから墳丘築造以前の弥生時代の遺構



第37図 トレンチB実測図 (1/60)

遺構面が分かれることからトレンチAの状況に似る。このことから墳丘築造以前の弥生時代の遺構

の可能性がある。溝状遺構は石室前面トレンチでは確認していない。

土層状況

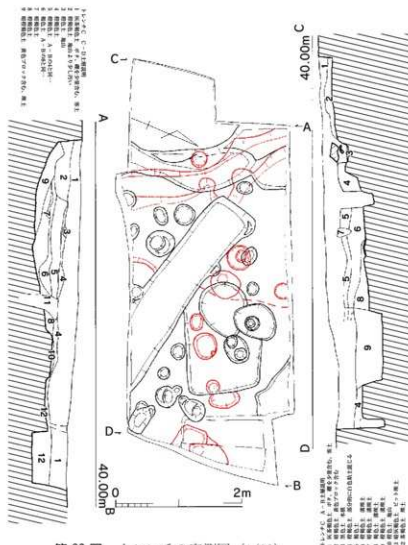
A-Bでは6、7、8層が溝の埋土であり、その上部4層から11層の柱穴が掘り込まれている。C-Dでも溝状遺構はトレンチ状の掘り込みに切られるが、A-Bと同様の状況が見られる。

(6) その他の出土遺物 (第39図、図版23)

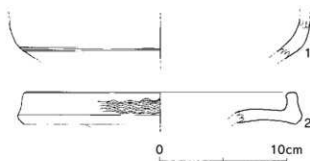
1は須恵器の壺胴部である。出土地点は石室前面トレンチであるが、17層中と上部のかく乱土中の2箇所から出土した破片が接合した。外面はカキメ調整と沈線に区画されたヘラ描きによる刻目を施す。内面はヨコナデを施す。焼成は良好であり、胎土は粗い。灰色を呈する。2は工事中に墳丘で表採した弥生土器の口縁部である。口縁部は屈曲し立ち上がるため二重口縁状になると考えられる。外面は立ち上がる部分はくし描きによる波状文が施され、他の部分はナデ調整を施す。内面はヨコナデ調整を施す。

(7) 墳丘土層 (第40図、図版19)

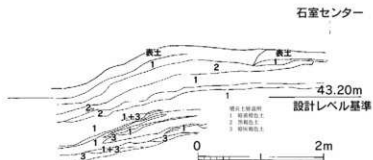
平成15年度工事の際、墳丘で樹木の除去作業を行った。その際、抜根作業後に墳丘土層の観察の機会を得たため実測図を作成した。基本として表土下は1の暗黄橙色土、2の黒褐色土、3の暗灰褐色土が確認できた。上部は1と2が互層に積み、下部では1と3がより細かい単位で積まれる。上部は比較的1層の単位が厚く、長い。



第38図 トレンチC実測図 (1/60)



第39図 その他の出土遺物実測図 (1/3)



第40図 墳丘土層断面図 (1/60)

V. 伊方古墳・野添横穴墓出土資料の保存修復

九州歴史資料館
加藤 和 歳

1. はじめに

考古資料のうち、出土した金属製の資料については、埋蔵中にさまざまな要因から物性が変化し、出土した時点においては、すでに劣化した状態にあることがほとんどである。そして出土後も劣化は止むことなく進行し、やがては崩壊への道を辿ることとなる。このため出土した状態のままでは、文化財保護上の使命である恒久的な保存を図ることはもちろんのこと、一般に向けた展示・公開などの利活用に供することも不可能となってしまう。したがって、こうした資料に対しては恒久的な保存を目指した保存修復処置を施し、さらに適切な保存環境下での管理が求められるところである。

本稿では、伊方古墳、野添横穴墓出土資料のうち、銅を主体とした金属製の資料について実施した保存修復処置について述べていく。

2. 修復前の状態

2.1 伊方古墳出土土金具

全体的に変形はなく、原形は保たれ、安定した状態ではある。表面の状態については、半球状を呈した鉢部は、その2分の1程度は土砂に覆われているものの、残りは表面が露出している。露出した部分は、その大半は緑青に覆われているが、ごく一部に金が見える。脚部は現状で2脚残存している。全体的に土砂に覆われており、細部の確認は困難である。裏面は、全体に土砂に覆われているが、鉢部端部の観察から脚部の欠損箇所が2ヶ所認められ、現状では2脚が残存しているが、オリジナルは4脚と推定できる。また、同じく端部には、金属板が折り返されている痕跡が見える。

2.2 伊方古墳出土土鈴

全体的に良好に原形を留めており、状態も安定している。表面は土砂に覆われているが、一部に赤褐色を呈している部分があることから、一見すると鉄製に見えるが、細部を観察すると緑青が確認できることから、銅を主体とした材質であることが窺える。この赤褐色は、オリジナルに起因するものではなく、土中の鉄分や、他の鉄製品の影響など埋蔵中に何らかの事由により、二次的に生成されたものと推定される。内部には丸が1点、錆着して残る。肉眼で見たところ、石であると思われる。

2.3 野添横穴墓出土銅

昭和49年の農道工事の際に出土したとされる資料であるが、全体的に土砂の付着は少ない。緑青に覆われ、華奢な作りの印象であるが、原形を留めている。一部に、オリジナルではないかと想定できるメタル部分が露出している。

3. 事前調査 - 材質分析 -

3.1 分析方法

考古資料を保存修復する際の作業工程に事前調査と呼ばれる工程がある。これは、対象資料を本格的な修復処置を施すにあたり、事前にその素性を把握しておくことによって、よりの確な修復方針を立案し、適正な修復処置を実施していくため行われる調査である。このため調査には理化学的な手法を用い、人的能力の及ばない領域に及ぶこととなる。

今回、修復対象としている資料は、修復前の状態の観察から銅を主体とした材料による資料であることや、辻金具については、表面に金が残存していることから、表面に加飾が施されていたことが推察できる。したがってその材質を的確に把握した上で修復方針を立案することとした。

また、調査にあたって、測定データの比較検討のため同町内所在の野添横穴墓A-1号横穴墓（平成2年度調査）から出土した鈴についても材質分析を行った。

材質分析は、資料の性格上、非破壊的手法によることとし、現在、文化財に対して一般的に用いられている蛍光X線分析法を用い、資料に対して、直接、分析を行った。蛍光X線分析法は、資料の表面にX線を照射することで、その資料が含んでいる元素に固有な二次X線（蛍光X線）を検知器で捕らえることで、その強度と分布をピークとして表すものである。

分析は福岡市埋蔵文化財センター設置の微量領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置（エダックス社製 Eagle μ -probe）を用いて行った。

測定条件は以下のとおりである。

管電圧 40KV / 管電流 30 ~ 110mA / 管球の対陰極 Mo / 検出器 半導体検出器 / 測定雰囲気 真空 / 測定範囲 0.3mm / 測定時間 300L 秒

分析箇所を選定にあたっては、表面を実体顕微鏡で観察し、清浄かつコンディション良好な箇所を任意に選定した。測定は各資料複数箇所実施し、定性的に元素の確認を行った。

なお、考古資料に対して蛍光X線分析法を用いることについては、従来からさまざまな問題点や課題が指摘されている。例えば資料本体そのものの資料本来の情報以外が含まれているX線のピークの同定などがあるが、今回の分析にあたっては、複数箇所を測定し、それぞれのスペクトルをチェックするなど留意しながら実施している。

3.2 分析の結果

分析結果を第41図～44図にそれぞれのスペクトルを示す。結果は分析箇所による差異は特段みられないので、掲出は1ヶ所づつとしている。以下、個々の結果について検討していきたい。

まず、伊方古墳出土辻金具のスペクトルには、銅（Cu）、そしてスペクトル上では僅かに見えるが、水銀（Hg）と金（Au）が確認できるので、銅製の板に、金アマルガム法による鍍金が施されていたことが推定できる。さらに、このことから、修復前に観察していた、裏面に折り返されている金属板が銅製であり、その下は鉄であることから、改めて表面のみを金で加飾したいいわゆる鉄地金銅張であることがわかる。

次に、伊方古墳出土鈴であるが、銅（Cu）を主体に錫（Sn）と鉛（Pb）を確認できるので、いわゆる青銅であるといえる。他の元素は確認できないので、表面の加飾はなかったものと推定できる。

なお、鉄 (Fe) は埋蔵中のコンタミネーションであると思われる、資料の材質とは直接、関わりのない元素と思われる。

また、野添横穴墓出土銅についても、銅 (Cu) を主体に錫 (Sn) と鉛 (Pb) を確認できるので、これも青銅であるといえる。スペクトル上には表示していないが、他に若干、銀 (Ag) とアンチモン (Sb) が含まれている。

最後に野添 A-1 号横穴墓出土鈴であるが、これについても、銅 (Cu) を主体に錫 (Sn) と鉛 (Pb) を確認できるので、青銅であるといえる。この資料にもスペクトル上に表示していないが、若干、銀 (Ag) とアンチモン (Sb) が含まれている。

ただし、この資料は、他と比較すると、スペクトルに錫のピークが高く出ている。錫や鉛は偏折することや、あくまでも表面の分析であることにより、資料の表面状態によってスペクトルは変化するものなので、あくまでも印象に過ぎないのであるが、鈴の用途上、硬く製作することを考慮して錫を多めに含有させたのでは、と感じさせられる。

以上、それぞれの結果は、古墳時代の馬具、装身具の材質としては、ごく一般的であると思われるが、改めて表面の加飾の存在などについての確に把握できたことは、資料のクリーニング方法など修復の方針を立案する上で、有益な情報を得ることができたと考える。

4. 保存修復

今回、対象資料について行った保存修復処置は、以下のとおりである。

4.1 修復前記録

修復前の形状、法量や写真撮影を行い、現況などの項目が設定されている当館にて定めている「保存処理受入カード」の作成を事前に行ってもらうことで記録とした。

4.2 事前調査

3で述べたとおり材質分析を行った。詳細は前述のとおり。

4.3 クリーニング

表面に付着している土砂を筆や竹串、実験用メスなどを適宜、使用しながら物理的に除去した。また、適宜、エタノールを用いて洗浄作業も行っている。

4.4 安定化処置

表面に生じた錆の進行を抑制するために、ベンゾトリアゾール (BTA) 2 w %エタノール溶液を減圧下に含浸させ、錆の安定化を図った。

4.5 樹脂含浸

資料の強化を目的に、青銅製の資料に一般的に使用される合成樹脂のパラロイド B-72 5 w %キシレン溶液を2回、さらに表面のコーティングのためにパラロイド NAD-10 30 w %ソルベントナフサ溶液を1回、それぞれ減圧含浸した。

4.6 復元・接合

伊方古墳出土土金具について、脚部の折損部分をエポキシ樹脂系接着剤（商品名；セメダインハイスーパー5）によって接合した。

5. おわりに

今回の保存修復処置により、当該資料は展示・公開などの利活用に供することが可能となった。しかし、こうした処置を行ったからといって、恒久的な保存が実現するわけではない。実現には適切な保存環境のコントロールが必須であり、例えば、温湿度環境をはじめとする資料の特性に見合った保管環境の設定などの取り組みが望まれているところである。そのなかでも、まず、すぐにも取り組みそうなのは、いわゆる「目通し、風通し」と呼ばれる資料の定期点検活動がある。これは定期的に資料の状態を直に確認する作業であるのだが、このことこそが資料の適正な保存環境のコントロールへの第一歩であり、恒久的保存実現へのキーとなろう。

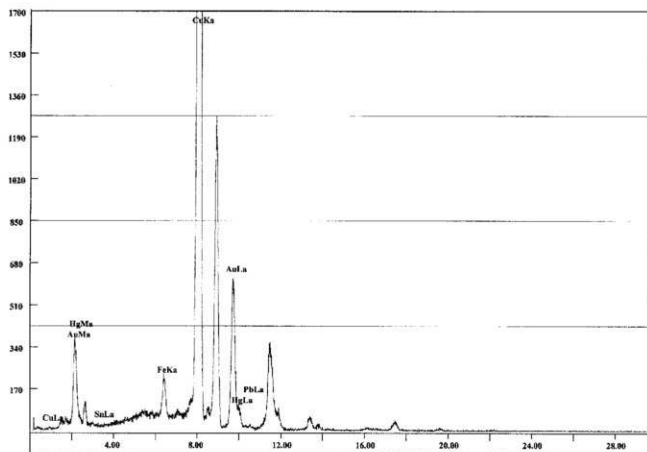
次に、修復の過程で行った材質分析については、今回、4点のみの分析であったことから、踏み込んだ考察については課題としておきたい。今後、機会あるごとに、同様の分析を積み重ね、調査事例の増加や類例の把握に努めることで、新たな知見の提供に寄与するべく、保存修復活動を推進していきたい。

最後に、材質分析の実施にあたっては、福岡市埋蔵文化財センター設置の機器を利用させていただき、同センター比佐陽一郎、片多雅樹両氏にお世話をいただいた。福智町教育委員会の井上勇也氏には、今回の保存修復の機会を与えていただくなど、さまざまなお世話をいただいた。以上の方々に対して、末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

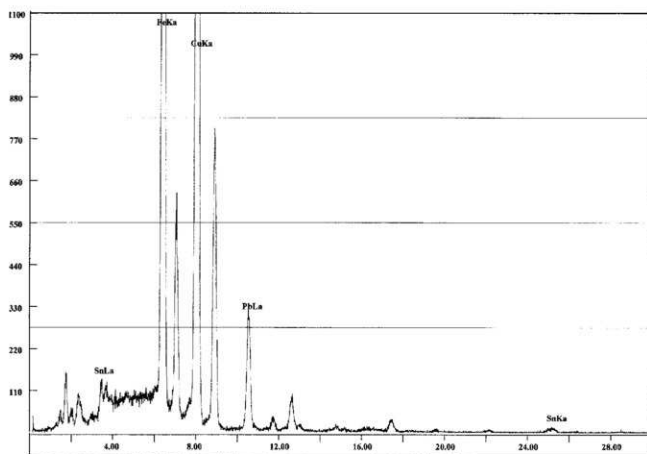
参考文献

水ノ江和同 新原正典 『伊方古墳 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅 野添遺跡群』 方城町文化財調査報告書 第5集 方城町教育委員会 1998

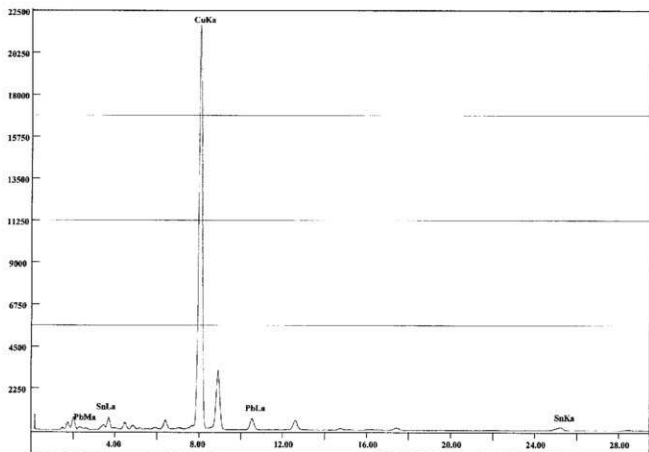
村上 隆 「蛍光X線分析法における諸問題」 『保存科学研究集会2000 非破壊的手法による考古資料の分析と観察』 奈良国立文化財研究所 2000



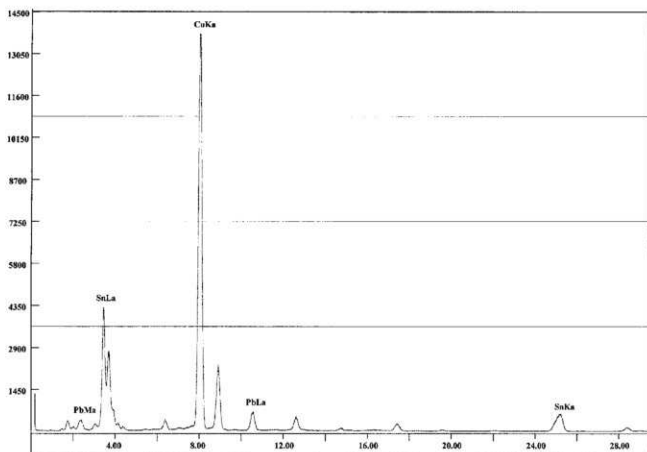
第 41 図 伊方古墳出土土辻金具の蛍光X線スペクトル



第 42 図 伊方古墳出土土鈴の蛍光X線スペクトル



第 43 図 野添横穴墓出土銅の蛍光 X 線スペクトル



第 44 図 野添 A -1 号横穴墓出土鈴の蛍光 X 線スペクトル

VI. おわりに

1. 伊方古墳の築造及び使用時期について

(1) 出土遺物の検討

伊方古墳の築造時期であるが、原位置を保つ遺物はほとんどない。墓道埋土の17層から下部は古墳時代と考えられる埋土であり、追葬等の二次移動があるものの築造時期に近い遺物があると考えた。そこで、墓道埋土の17層から下部で出土した須恵器をもとに考えてみる。

墓道埋土のなかで古いタイプと考えられるのは第27図17、18の腿、第27図15の高坏、第27図2、9の坏類がある。第27図17、18の腿はほぼ同じ形態である。形態は扁平な球形で、胴部中ほどに上下の沈線でごく画された文様帯があり、ヘラ状工具による連続する斜線文がある。頸部から口縁部は残存しないが頸部の付け根は細くしめる。形態と文様が施される点から見て、小田編年Ⅳ期の範疇で捕らえられよう。第27図の高坏であるが透かしはないものの長脚であり、この特徴は陶邑のTK209、小田編年Ⅳ期でもⅣAの範疇で捕らえられよう。第27図の坏類であるが口径、受け部径ともに12cm 台後半である。9の坏身の径は小型化するが立ち上がりはしっかりしており、2の坏蓋では天井部外面にタタキ、内面に当て具痕が残る。形態から見ても径の小ささのみで時期を下げることはできず、TK209、小田編年Ⅳ期でもⅣAの範疇で捕らえられよう。また、伊方古墳で出土する須恵器の甕には口縁の波状文が見られない。主に見られる文様はヘラ状工具や刺突文による連続した斜線文である、波状文からこれらの文様への変化は小田編年のⅢB期の中で起こることが指摘されており、前述の遺物の年代観と合わせⅢB期以降であり、ⅣA期をくだらない時期であり6世紀の末までには築造されたと考えられる。

使用時期であるが17層下の23層から出土した遺物を見ていく。第27図の21、22の坏蓋は小田編年のⅤ期の特徴を示し、28の土師器高坏の脚部は6世紀の後半から7世紀の前半まで見られるものである。このことから、23層は7世紀の前半に堆積したと考えられる。また、23層は層中に転石等が見られ、遺物もほぼ同時期であるため追葬行為等の年代を示すと考えられる。

(2) 周辺の古墳との比較

次に周辺地域の石室との比較から築造時期を考えてみる。従来、伊方古墳では床面が未検出であり、高さが低く、箱型に近い石室プランのため新しく考えられていた。今回、調査において床面を確認し0.5mほど高さが高くなった。その点を考慮に入れ検討する。

伊方古墳のある遠賀川流域で大型墳といえは鞍手町の新延大塚古墳、田川市の夏吉21号墳があげられる。

新延大塚古墳の石室全長は11.95m、玄室高は4mを測る。腰石以外の石材は小ぶりであり、玄室では重箱積が見られる。持ち送りもしっかりしており、夏吉21号墳、伊方古墳よりも古く位置づけられる。報告では6世紀後半代の年代が与えられている。

夏吉1号墳の石室全長は略測で約12.5m、玄室の高さ2.88mを測る。玄室、羨道部ともに側壁腰石は1石用い、奥壁は1枚の石を立て天井部との間隙に扁平な石を詰める。伊方古墳も玄室、羨道部の側壁腰石は1石を指向している。上部の石積みも比較的大きな石を用い、1段から2段と非常によく似る。ただ、横断面を比較すると伊方古墳の玄室の方がより長方形に近い。伊方古墳で

は目地に粘土の充填が見られやや丁寧なつくりである。前後関係であるが、夏吉 21 号墳の出土土器が古く TK43 から TK209 くらいであろう。伊方古墳出土遺物は TK209 くらいであり、やや新しい。時期的には夏吉 21 号墳が 6 世紀末に位置づけられる。

遠賀川の流域ではないが、同じ豊前地域の京築地域には多くの大型墳が存在する。そこで、6 世紀後半の築造とされる橋塚古墳を見ていく。推定全長は約 17.5 m、玄室の高さは 3.8m を測る。使用石材も巨石であり、積み方はやや粗く夏吉 21 号墳に似る。石室のプランも長さが短く、規模の大小があるがよく似ている。報告では出土須恵器は TK43 とされる。

以上周辺地域の古墳を数基みてきた、この中でもっとも古い石室は新延大塚古墳である。他の古墳と違い、使用石材、石積みなどの技法から今回扱った豊前地方で見える大型墳とは同じ系統とは考えがたい。

豊前地方の時期が近接する大型墳の石室は、形態、石積みの方がよく似ている。伊方古墳の石室はより長方形に近いプランではあるが、豊前地域の流れの中でとらえられよう。伊方古墳の築造は橋塚、夏吉 21 号墳に続く時期に行われたと考えられる。

(3) 小結

以上出土遺物、周辺地域の石室との比較検討を行った。その結果、周辺で巨石墳の作られたられた時代は TK43 から TK209 の時期、小田編年でⅢ B からⅣ A 期の間、執筆者の年代観ではあるが 6 世紀の後半から末くらいの時期と考えられる。伊方古墳は其中でも終盤に位置づけられ、6 世紀の末ころの築造とするのが適当であろう。

2. 伊方古墳の規模

今回調査において、墳丘の前面で周溝の残存部を確認した。検出した周溝は部分的ではあるが、その残存部から墓道まで続く褐色に変色した溝の痕跡が続き墓道に接続する。この部分は周溝の痕跡と考えられ、この周溝の内側のライン前後が墳丘の裾部に当たると推定した。その結果、墳丘規模は直径約 32 m となる。周溝は幅約 2 m 前後が残存しており、周溝の外側で径 36 m 前後の規模となる。

そのほかに、伊方古墳に伴うと考えられる遺構としてトレンチ B で検出した溝がある。この溝は石室センターを中心に復元した場合径 34 m 付近のラインを通る。溝は工事時の確認で延長することが判明したが、石室前面において検出した周溝と約 1 m の比高差がある。現状で周溝の可能性も考えられるが、断定はできない。また、隣接地の伊方石丸遺跡の調査時において、同じく復元径約 36 m のライン上に土坑、溝が検出されている。トレンチ B、伊方石丸遺跡で検出された遺構を周溝の残存と考えるなら、墳丘裾部は不整形になる。そのためこれらの遺構は、周溝の残存である可能性は低い。

3. 特徴的な遺物

第 27 図 19、27、第 28 図の 42 のような土師器の小型脚坏壺が出土した。これらの遺物の類例は八女の乗場古墳や立花町の小倉谷横穴墓群で確認される。近隣では執筆者の調査不足もあろうが、

出土例が知られていない。このことは、筑後地域との何らかの交流を示すものと考えられ、今後周辺の出土遺物を注意深く見ていく必要があろう。

4. まとめ

今回、旧方城町で行った伊方古墳の保存整備事業について報告をまとめた。調査の際、石室内はかなりのかく乱を受け、本来の床面はほとんど残っていなかった。代わりに進入の痕跡が明瞭に残され、侵入の年代も確認することができた。前室かく乱土中で出土した土器は13世紀ころの瓦器、土師器が主体であった。この時期の遺物は墓道埋土の17層上からも出土し、13世紀ころに盗掘や再利用が行われたと考えられる。その後に進入の痕跡が認められるのは、寛永通宝が出土することから江戸期と考えられる。玄室の床面まで及ぶかく乱は遺物がほとんどなく、時期の判定は困難である。しかし、前室のかく乱が新しく、玄室のかく乱を切る状況があり、古墳時代以降13世紀以前にも侵入者があったことが推定される。

今回、伊方古墳は石室内など大きなかく乱を受け、どの程度の情報が得られるのか不安であった。何とか周溝を検出し、古墳の規模の推定が可能になった。また、出土遺物、構造から築造年代も推定できた。不勉強ながら、整備工事も何とか終了することができた。報告書が調査の内容に偏り満足な整備報告が出来なかった点を反省し、末筆ながら調査中より多くの助言、指導をいただいた方々に感謝申し上げます。

注

第45図掲載の田川市夏吉古墳群21号墳は井上撮影、鞍手町新延大塚古墳、みやこ町橋塚は各教育委員会から掲載許可をもらい、写真の提供を受けた。

参考文献

小方泰広 1987 「夏吉古墳群の歴史的意義」『郷土田川 30号』田川郷土研究会

副島邦弘・横田義章・渡辺正気編 1985 『新延大塚古墳』鞍手町文化財調査報告書第3集 鞍手町教育委員会

水ノ江和同・新原正典 1998 『福岡県指定史跡 伊方古墳 福岡県指定史跡 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅 弥生・古墳時代墳墓群 野添遺跡群』方城町文化財調査報告書第5集 方城町教育委員会

飛野博文・井上信隆 2006 「六 橋塚古墳」勝山町史上巻 第二編 第四章 第四節 勝山町史編纂委員会編

舟山良一 2000 「牛頭窯跡群出土須恵器」九州土器研究会発表資料



田川市夏吉 21 号墳奥壁



みやこ町橘塚奥壁



鞍手町新延大塚古墳前壁

第 45 図 近隣の石墳

図 版

1. 伊方古墳
調査前状況



2. 玄室
調査後状況



3. 石室床面
完掘状況





1. 玄室隅部の
状況
(奥壁と右側壁)



2. 玄室隅部の
状況
(右側壁と袖石)



3. 前室床面
完掘状況

1. 前室床面
石材検出状況



2. 閉塞石
終点状況



3. 石室入り口部
閉塞石検出状況





1. 玄室
縦断土層状況 1

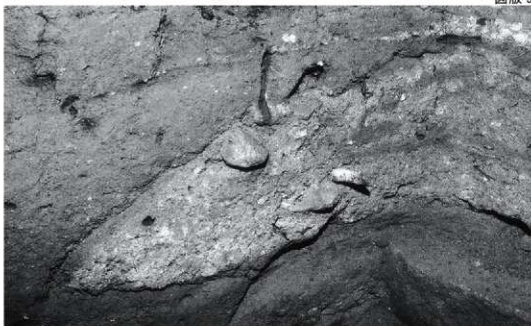


2. 玄室
縦断土層状況 2



3. 玄門部C-D
土層状況

1. 前室
縦断土層状況



2. 前室E - F
土層状況



3. 前室G - H
土層状況





1. 墓道部
完掘状況



2. 周溝検出状況



3. 周溝検出状況 2

1. 石室前面
トレンチ縦断
土層状況
(上部)



2. 石室前面
トレンチ縦断
土層状況 1



3. 石室前面
トレンチ縦断
土層状況 2





1. 石室前面
トレンチ横断土層
状況 1



2. 石室前面
トレンチ横断土層
状況 2-1



3. 石室前面
トレンチ横断土層
状況 2-2

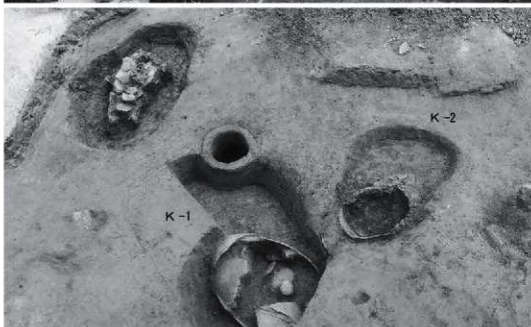
1. 周溝土層状況



2. トレンチA
完掘状況



3. トレンチA
K-1、K-2
検出状況





1. トレンチA
K-1 完掘状況



2. トレンチA
K-2 完掘状況



3. トレンチA
土層状況 1

1. トレンチA
土層状況 2



2. トレンチB
完掘状況



3. トレンチB
土層状況





1. トレンチB
溝部分検出状況



2. トレンチB
溝部分土層状況



3. トレンチB
西側工事時拡張部分
溝検出状況

1. トレンチC
上面



2. トレンチC
完掘状況



3. トレンチC
A-B
土層状況 1





1. トレンチC
A - B 土層状況 2



2. レンチC
C - D 土層状況 1



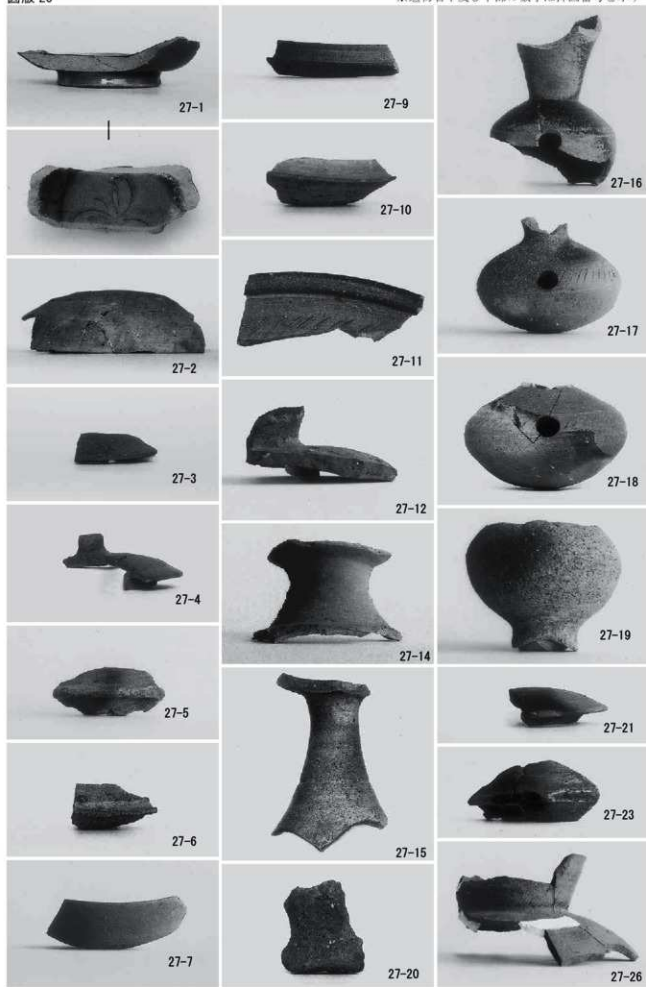
3. トレンチC
C - D 土層状況 2

1. 墳丘土層状況

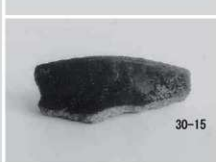
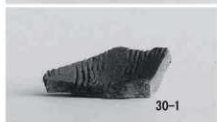


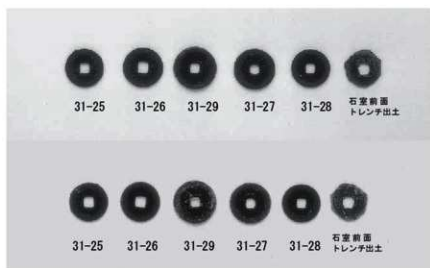
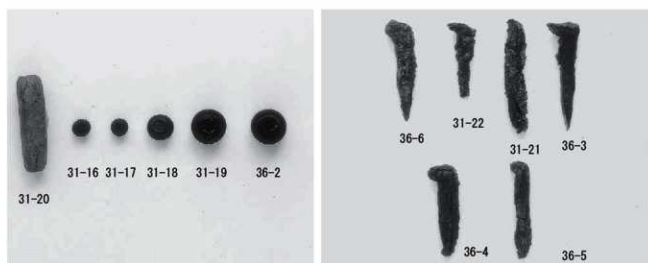
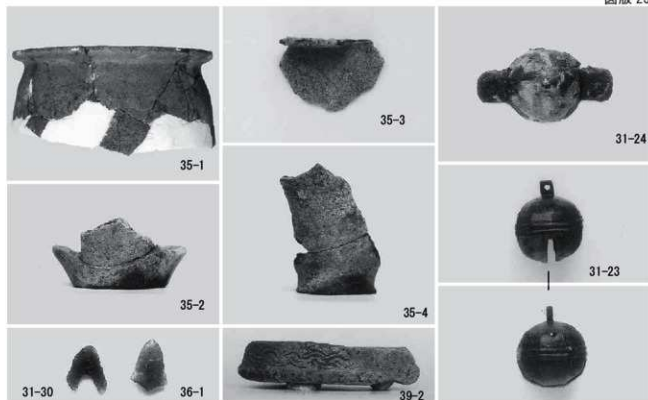
2. 伊方古墳頂部
より下田川を
見る











報 告 書 抄 録

フリガナ	ケンシテイシセキ イカタコフン
書 名	県指定史跡 伊方古墳
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	福智町文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編 著 者 名	井上 勇也
編 集 機 関	福智町教育委員会
所 在 地	〒822-1101 福岡県田川郡福智町赤池970番地2
発 行 年 月 日	平成19年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査機関	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
イカタコフン 伊方古墳	福岡県田川郡 福智町伊方 3946番地		840021	33° 42' 10"	130° 48' 10"	2003.3.1 ? 2003.3.31 2003.9.20 ? 2004.1.30	584.3 m ²	保存整備 工事に伴う 事前調査

県指定史跡

伊方古墳

福智町文化財調査報告書第1集

平成19年3月30日

発行 福智町教育委員会

〒855-1101 福岡県田川郡福智町赤池970番地2

印刷 有限会社 青雲印刷

〒803-0841 北九州市小倉北区清水1丁目8-7

